町民参加の町史づくり

竹富町史だより

第43号
2019年３月29日

竹富町教育委員会
沖縄県石垣市新栄町６－18
TEL （０９８０）８７－６２５７

目　次

鳩間島の水源……1

水利をめぐる伝承
—西表島祖納集落のウーヒラカー—　星野義岳……2

島々の踊り・狂言№.4　第19回竹富町民俗芸能発表会……7

波照間島の農業の伝承知識
—＜畑の民俗名称＞の事例から—　古谷野洋子……9

2018年度　竹富町史編集係業務日誌抄……10

第39回竹富町史編集委員会議事録……11

〈資料紹介〉波照間島小学校沿革誌③……15

編集後記……66

表紙の写真

写真は2018年６月30日、西表島祖納の大宿家（ウバイデ）の落成祝の風景。祖納集落伝統的なで新築祝がなされたのも10数年ぶりだという。祝宴では結人加那志の儀式が行われました。

鳩間島の水源

鳩間島の《みりくうた》は、「鳩間井泉ぬ水や／いちまでぃん変わらぬ／うり頼てぃ鳩間／世果報でむぬ」（鳩間島の井泉の水は、いつまでも変わらない、これを頼って鳩間島は、豊作である）とうたわれています。ここから井戸が村人の心のよりどころであることが理解できます。

鳩間島の豊年祭の３日目は、シナピキヌピン（綱引きの日）といって綱引きが行われます。「ヒーヤユイサー」の掛け声とともに盛り上がってくると、婦人たちにより「イジクナー」が演じられます。これは東西両村の婦人が向かい合い、それぞれの村の自慢を即興的にうたって張り合う掛け歌のことです。例えば、東村が私たちの村には学校があるとうたえば、西村は桟橋があるといった調子で張り合います。

定番の歌詞として、西村が「我んたー島なー大稲叢てん小稲叢てんあんだらー（私たちの村には大きな稲叢も小さな稲叢もあるよ）シックリササー」とうたえば、東村は「我んたー島なー降り井泉てん釣瓶井戸てんあんだらー（私達の村には降り井戸も釣瓶の井戸もあるよ）シックリササー」と対抗します。ここでは東村の誇り高き井戸として、降り井泉がうたわれていますが、これは東ヌ井戸のことです。

アンヌカーは、地上に大きく入口を開き、自然の洞窟が傾斜して地下へ約20m発達したもので、地下水が地底部から湧出しています。傾斜した階段は石畳状に組まれています。東村の人々は、この階段を水担桶を担いで水汲みに通い、飲料水にしました。水は甘くて冷たい、美味しい水であったと伝えられます。この水は東村の人々の命を繋いだ尊い水だったのです。第二次世界大戦時は、実際に空襲があった時、アンヌカーの自然洞窟に避難したそうです。

鳩間島は1980年の海底送水が通る以前、東村の東ヌ井戸、西村の西ヌ井戸、そしてウイヌカーの三つが主な水源となりました。旧暦１月と８月には、「井戸ヌ願」が行われますが、この祭祀はこれらの井戸が枯れることがないよう祈願を捧げ、また豊かな水への感謝と、村人の健康祈願がテーマです。ちなみに、井戸ヌ願で東ヌ井戸は小浜家、西ヌ井戸は仲本家、ウイヌカーは加治工家が担当して祈願しました。

（『竹富町史　第六巻　鳩間島』参照）

東ヌ井戸

水利をめぐる伝承

―西表島祖納集落のウーヒラカーの位相―

星　野　義　岳

1　はじめに

水利をめぐる伝承について、ウーヒラカーの由緒を振り出しにして、探究していく。水利とは、飲料や灌漑などに、液体を使用することをいう。その客体は、井泉だったり池沼だったり水路だったりする。以下に研究の、動機と目的と方法を述べたい。

第一に、動機を述べる。沖縄県八重山郡竹富町西表の祖納集落には、ウーヒラカーと呼ばれる井泉がある。竹富町教育委員会の碑文「大平井戸」、つまり現地表示から由緒を紹介したい。

> この井戸は、伝承によると今から約500年前、まだ祖納の集落が祖納半島の高台「上村」にあった当時、高台で水に不自由していたところ、慶来慶田城用緒がこれを解消するために掘ったものといわれています。その後、飲料水用の井戸として祖納の人々の生活を支え続けてきたことから水恩に感謝する儀式が行われるようになり、今日では、節祭の３日目に水恩感謝の儀式と奉納芸能がこの大平井戸で行われます。

筆者は、2016年11月15日に実施された水恩感謝の儀式について、許可を得たうえで見学および撮影をした。午後12時30分に、祖納公民館からウーヒラカーに向けて、旗頭が出発する。水恩感謝の儀式は、１時15分に始まり、途中で狂言や棒術などを挟みながら［６頁写真］、２時まで続いた。ウーヒラカーという水利が、慶来慶田城用緒という偉人を介しつつ、今日でも尊重されている適例といえよう。もっとも、ウーヒラカーの由緒が、南西諸島または本土を含めた範囲のなかで、どのような位置づけになるのか、ということは簡単に説明しがたかった。

第二に、目的を述べる。水利をめぐる伝承にいかなる種類があるか、そのなかでウーヒラカーの由緒がいかなる位相にあるか、整理したい。たしかに、水利をめぐる伝承には、先学も注意を払ってきた。たとえば、『昔話・伝説小事典』には、「水争いの話」の項目が立てられている［高木　1987：219］。また、沖縄県内では、沖縄学の父こと伊波普猷が、宮古島市平良の白明井を、踏査したうえで論攷していた［伊波　1942：218］。しかし、これらは水利をめぐる伝承の、事例を分析するものではあっても、全体を掌握するものではなかった。

第三に、方法を述べる。本稿では、水利をめぐる伝承を、「水利の開始」「水利の最中」「水利の分配」「水利の終了」に分類する。それぞれにおいて、南西諸島の伝承を提示し、参考までに本土の伝承も付記する。こうした伝承は、公刊されて閲覧しやすく、かつ研究の対象になりにくかったものから選定した。

2　水利の開始

まず、南西諸島の伝承について。島尻郡八重瀬町具志頭の「白川桃原樽金と川平良井小」を、具志頭村史編集委員会編『具志頭村史』第３巻から引用する。杖で井泉を予言したという内容で、いわゆる弘法清水である。

> 当時、付近の住民は飲料水に不自由していた。ある日、樽金は近傍を精密に調査し、ここにはかならず水があると言って杖をその地に突きさして立ち去って行った。人々がその地を掘ったところ、樽金の予言にたがわず、清水がこんこんと湧き出て来た。以後、付近の住民は水に不自由しなかったと言う。［具志頭村史編集委員会編　1993：18］

類話に、杖で井泉を掘ったとする、鹿児島県

大島郡喜界町長嶺の「長嶺のシマ建て」がある［岩瀬、高橋、松浪編　2006：40］。このほかの伝承を挙げる。弘法清水以外では、動物が井泉を発見した、という伝承が目立っている。たとえば、島尻郡久米島町嘉手苅では牛が［鄭編　1968：326］、宮古郡多良間村仲筋では猫が［多良間村役場編1981：219］、八重山郡竹富町竹富では犬が［崎山　1972：680］、それぞれ発見したとする。国頭郡伊江村西江上の「砂堂池由来」は、溜池を造るさい、最初は水が溜まらなかったので、砂を持って来て踏み固めたという［遠藤編　1989：193］。

つぎに、本土の伝承について。弘法清水は各地に分布し、通常は弘法大師の偉業としている。ただし、富山県富山市堤町通りでは蓮如上人の［富山市史編さん委員会編　1987：1501］、長野県諏訪郡富士見町落合では諏訪頼重の［諏訪史談会編　1996：31］、奈良県奈良市池田町では聖徳太子の［奈良県史編集委員会編　1988：346］、それぞれ偉業とする。京都府京丹後市大宮町周枳の「人杖」は、水路を掘ったものの通水せず、村人が「さあ越せ」と叫ぶと、不思議に通水したという［大宮町誌編纂委員会編　1982：813］。愛媛県松山市高田の「坊さん池」の話」は、水不足を見兼ねた諦信上人が、自力で溜池を造った話［北条市誌編集委員会編　1981：974］。福島県石川郡玉川村岩法寺の「喜十太郎池の伝説」は、水不足から溜池を造るも、土手が崩れるので人柱を立てたもので［玉川村編　1980：515］、長良の人柱の一例である。

3　水利の最中

まず、南西諸島の伝承について。島尻郡南風原町大名の「大名のトンガー清水」を、南風原村史編集委員会編『南風原村史』から引用する。王妃が井泉を使用したという内容で、水利の最中を描写している。

兼城按司の長女は尚円王の最初の王妃であった。この王妃はからだが弱かったので、ある日王城に登城するとき、大名のトンモーで貧血をおこし意識を失った。カゴ舁ぎのものどもは乞驚(［吃驚］) 仰天、カゴをとめて近くのトンガーから水を汲んで飲ました。王妃はその清水で意識をとりもどした。それ以来トンガーを拝所として住民がおがむようになった。［南風原村史編集委員会編　1971：427－428］

このほかの伝承を挙げる。中頭郡読谷村牧原の「牧原の坊主御主井戸」は尚灝王が［読谷村教育委員会編　1996：223］、うるま市与那城照間の「トゥイムトゥ井戸」は照屋按司が［遠藤監修　1989：294］、それぞれ使用したという。中頭郡読谷村大湾の「天川泉の殿様」は、若い男女が水浴びをしていて、これを見た殿様が歌謡を作る［読谷村教育委員会編　1999：99］。

つぎに、本土の伝承について。秋田県秋田市土崎湊穀保町の「幕洗川」は、坂上田村麻呂が幕を洗った場所［星野　2015：86］。三重県松阪市深長町の「深長の泉」は、松阪城主の古田重勝が茶湯として使用した［三重県立津高等女学校郷土地理調査部　1936：120］。京都府亀岡市本梅町東加舎の「萱ノ辻の清水」は、源義経が馬に水を飲ませた［田中1941：95］。

4　水利の分配

まず、南西諸島の伝承について。南城市玉城糸数の「鮫川大主と逆田」を、遠藤庄治編『たまぐすくの民話』から引用する。不平等に分配したという内容で、伊是名島で尚円王がした事跡として名高い。

ある年に飢饉で雨がなくて、みんな田んぼはひび割れしてるけど、この鮫川大主という方の田んぼは水がいっぱいしている。ある人が、「不思議だねえ。」と思って夜見ていると、この方は美男子なので若い娘さんたちがこの人の田んぼにみんな水持って行ってた。それで、この人の田んぼは稲がよく実ったもんだから、部落中から反対されたので、「ここでいたら自分の命が危ない。」と言って舟で馬夫の方に来て、佐敷に行かれたという話だよ。［遠藤編　2002：336］

このほかの事例を挙げる。中頭郡西原町桃原の「桃原の三人の武士」は、小波津集落と幸地集落との水争いで、桃原集落の猛者が土手に座ったところ、幸地集落の人たちが引き返した武勇伝である［遠藤編　1991：488］。鹿児島県大島郡和泊町玉城の「石橋川の水争ひ」は、玉城集落が水路を掘っているとき、皆川集落の人たちに魚が来ていると教えられ、魚取りに出かけている最中に、水路の方向を変えられてしまう［武山　1968：215］。鹿児島県大島郡伊仙町面縄の「ウービラ按司とウガン按司の闘争」は、ウガン城の攻防において、攻め手が川水を差し止めようとすると、防ぎ手が米で馬を洗うまねをしたという、一種の白米城になる［伊仙町誌編さん委員会編　1978：606］。

つぎに、本土の伝承について。神奈川県横浜市都筑区荏田の「伝承されるあらそい」は、下流の荏田集落が、水不足から早渕川を堰き止めたところ、上流の石川集落が水浸しになってしまう［緑区史編集委員会編　1993：475］。山梨県北杜市長坂町小荒間の「三分一湧水」は、武田信玄が湧水を三等分したものであるが［日本の水をきれいにする会編　1985：57］、近年になって創出された伝説ともいう。高知県安芸郡奈半利町の「三角田の怨念」は、三助と角平とが水争いから殺し合い、そののち怪異が続いたという伝承［奈半利町史編纂委員会編　1986：596］。なお、義民の関与する水利伝承は、別稿にて詳述したい。

5　水利の終了

まず、南西諸島の伝承について。浦添市宮城の「産井戸の話」を、浦添市史編集委員会編『浦添市史』第３巻から引用する。井戸を閉じると美人が生まれなくなったという内容で、いわゆる不美人出生譚である。

> 宮城のね、イリヌグムイといった、ここの前にね、イリヌ井戸というのかなぁ、あれは。宮城の産井戸さ。そこで皆、昔はね、産湯を使ったわけ。その水で産湯を使ってね、宮城には、とても美人がたくさん出てきた。だけど、その美人がたくさんできても、この産井戸で、そこで産湯を使った人は、皆きれいになりよったとよ。だけど、あるまー何で、そこのわくを閉じられてしまって、それからもう宮城は、皆ヤナカーギって…。［浦添市史編集委員会編　1982：80］

類話に、美人であると役人に連れて行かれるので井戸を閉じたとする、那覇市松川の「坂下の松川ミーハギ」がある［伊芸編　1992：16］。このほかの伝承を挙げる。宮古島市城辺保良の「崩れる保良泉」は、豊見親婆が保良泉で油断するなと予言し、娘とその叔母が芋を洗っていると、保良泉の断崖が崩れはじめる［福田ほか編　1991：429］。鹿児島県大島郡大和村名音の「田畑佐文主の話」は、水田を拓こうと水路を掘ったが、通水せずに断念する［田畑　2005：154］。

つぎに、本土の伝承について。新潟県十日町市松代の「池の主の話」は、野々見池の主と池尻池の主とが喧嘩をし、池尻池の主が居なくなると、池水が干上がってしまう［立石編　1985：197］。長野県南佐久郡佐久穂町畑「山の神と小塚明神の水争い」は、山の神と小塚明神とが争った末に、川水を土中に潜り込ませるという［南佐久教育会編　1939：17］、末無川の原型のような伝説である。広島県三原市大和町大草の「浜田・土取の地名の由来」は、蛇になる修行をしていた嫁が、それを見つけられた腹いせに、島田池の土手を切り、田圃が砂浜と化すというもの［大和町誌編纂委員会編　1983：1068］。

6　おわりに

水利をめぐる伝承について、祖納集落のウーヒラカーを振り出しにして、探究してきた。かねてより伝説研究では、水辺の伝説には留意をしても、液体としての水利には留意しにくかった。本稿では、「水利の開始」「水利の最中」「水利の分配」「水利の終了」に分類し、水利の名のもとに再構成した。この分類によると、ウーヒラカーの由緒は、「水利の開始」として位置

づけられよう。ちなみに、西表島古見集落のバギナカーは、女児が発見したといい［大底　2011：27］、動物でなく人間が井泉を発見したという点で、ウーヒラカーの由緒と共通する。以下に研究の、限界と展望を述べる。

第一に、限界について。水利をめぐる伝承として、４つに分類しうることは、本稿によって確認できた。しかし、紹介した伝承には限度があるので、それ以外の伝承がどのようなものなのか、いまだ全容が解明されていない。たとえば、秋田県湯沢市高松の幸左衛門湯は、幸左衛門が入浴して死亡したもので［菅江　1975：68］、なるほど温泉という水利もあると気づかせてくれる。幸左衛門湯は「水利の最中」とみて差し支えなかろうが、今後、想定外の事例が出てくることもありうる。

第二に、展望について。「水利の終了」で不美人出生譚を引用したが、不美人出生譚は南西諸島に稠密に分布している。首里の役人や、本土の武士に対する、民衆の不安感の表出であろう、と以前は直感として推測していた。しかし、本土に視野を広げると、これに類似した不美人出生譚が探し出せるのである。山口県山口市の「「山口男に萩女」の話」を、山口市史編纂委員会編『山口市史』各説篇から引用したい。

むかしむかし山口の城下に、世にも稀な美女がいた。ところである日、山口を治める殿様がこの美女を見染めて、早速、館へお召しになり、意に従うようと命じられたのであるが、美女には他に意中の人があったので、なんとしても殿様の意には従わなかった。いまはもう「可愛さあまってにくさ百倍」の殿様は、美女に縄をうたせて姫山に送り、山頂にある古井戸に投げ込み、その中へあまたの蛇を投げ入れて、いうところの“蛇責め”にしたものである。美女はその苦しみのなかで「この身がかりそめの美しさに生まれたばかりにうけるこの苦しみを、二度と後の世の女性にはさせないためにも、この山から見えるかぎりの土地には、これから後は美しい人を生まれさせはせぬ」と叫びながら死んだという。それから後というものは、その美女の呪咀（［呪詛］）の言葉がほんとうになったのか、絶えて山口には美人が生まれぬことになったという。［山口市史編纂委員会編　1971：459］

井泉を舞台としないが、美人が末期に呪詛するものに、高知県室戸市室戸岬町の「お市の坂」とか［室戸町誌編集委員会編　1962：559］、高知県土佐清水市下ノ加江の「鳴川の比翼塚」とか［土佐清水市史編纂委員会編　1980：879］がある。これらを踏まえると、南西諸島ならではの口承文芸とは何か、と問い直す必要が生じよう。水利に即しても、たしかに南西諸島は水不足に悩まされてきたが、それは本土の香川県などにも当てはまることであった。

参考文献

伊芸弘子編　1992.『沖縄・首里の昔話』三弥井書店

伊仙町誌編さん委員会編　1978.『伊仙町誌』伊仙町

伊波普猷　1942.『古琉球』改版、青磁社

岩瀬博、高橋一郎、松浪久子編　2006.『琉球の伝承文化を歩く』３、三弥井書店

浦添市史編集委員会編　1982.『浦添市史』第３巻、浦添市教育委員会

遠藤庄治監修　1989.『よなぐすくの民話』与那城村教育委員会

遠藤庄治編　1989.『伊江島の民話』伊江村教育委員会

遠藤庄治編　1991.『西原町史』別巻、西原町役場

遠藤庄治編　2002.『たまぐすくの民話』玉城村教育委員会

大底朝要　2011.「クンムラナイーツタイラリル「バギナカー」ヌパナスィ［古見村に伝わる「バギナカー」の話］」『第１回しまむに（方言）を話す大会』石垣市文化協会、pp. 26－27

大宮町誌編纂委員会編　1982.『大宮町誌』大宮町役場

具志頭村史編集委員会編　1993.『具志頭村史』

第３巻、具志頭村
崎山毅　1972.『蟷螂の斧』錦友堂写植
菅江真澄著；　内田武志、宮本常一編；　内田武志解題　1975.『菅江真澄全集』第５巻、未来社
諏訪史談会編　1996.『諏訪史跡要項』富士見村篇、復刻、諏訪史談会
大和町誌編纂委員会編　1983.『大和町誌』大和町誌編纂委員会
高木史人　1987.「水争いの話」『昔話・伝説小事典』みずうみ書房、p. 219
武山宮定　1968.「杉苗の伝来等七編」『沖永良部島郷土史資料』改訂増補、和泊町、pp. 213－219
立石尚之編　1985.『奴奈川の民俗』東洋大学民俗学会
田中勝雄　1941.『丹波の伝承』建設社出版部
田畑千秋　2005.『奄美大島の口承説話』第一書房
玉川村編　1980.『玉川村史』玉川村
多良間村役場編　1981.『多良間村の民話』多良間村役場
鄭秉哲編　1968.「遺老説伝」『日本庶民生活史料集成』第１巻、三一書房、pp. 301－343
土佐清水市史編纂委員会編　1980.『土佐清水市史』下巻、土佐清水市
富山市史編さん委員会編　1987.『富山市史』通史下巻、富山市
奈半利町史編纂委員会編　1986.『奈半利町史』奈半利町
奈良県史編集委員会編　1988.『奈良県史』第13巻、名著出版
日本の水をきれいにする会編；　環境庁水質保全局水質規制課監修　1985.『名水百選』ぎょうせい
南風原村史編集委員会編　1971.『南風原村史』南風原村役所
福田晃ほか編　1991.『城辺町の昔話』下、同朋舎出版
北条市誌編集委員会編　1981.『北条市誌』北条市誌編纂会
星野岳義　2015.「菅江真澄の採集した西行伝承」『社学研論集』25、pp. 73－88
→星野岳義『口承文芸と民俗芸能』日本評論社、収載
三重県立津高等女学校郷土地理調査部　1936.『三重県伝説集』三重県立津高等女学校
緑区史編集委員会編　1993.『横浜緑区史』通史編、緑区史刊行委員会
南佐久教育会編　1939.『南佐久郡口碑伝説集』信濃毎日新聞社
室戸町誌編集委員会編　1962.『室戸町誌』室戸町史跡保存会
山口市史編纂委員会編　1971.『山口市史』各説篇、山口市役所
読谷村教育委員会編　1996.『読谷村民話資料集』13、読谷村教育委員会
読谷村教育委員会編　1999.『読谷村民話資料集』14、読谷村教育委員会

水恩感謝の儀式（西表島祖納、2016年11月15日筆者撮影）

竹富町制施行70周年記念

第19回　竹富町民俗芸能発表会

平成30年12月１日　午後５時30分　開会
於：中野わいわいホール

〈第１部〉

舞踊　「マサカイ」（竹富民俗芸能保存会）

舞踊　「ちんだら節」（黒島民俗芸能保存会）

舞踊「大原節」（新城民俗芸能保存会）

舞踊「胡蝶の舞」（小浜民俗芸能保存会）

舞踊「殿様節」（船浮民俗芸能保存会）

舞踊　「舟浮乙女」（船浮民俗芸能保存会）

長者の大主（古見民俗芸能保存会）

〈第２部〉

狂言「ピラ」（鳩間民俗芸能保存会）

独唱「デンサ節」（第17回デンサ節大会最優秀賞）

舞踊「干立口説」（干立民俗芸能保存会）

舞踊「デンサ節」（上原民俗芸能保存会）

舞踊「高那節」（上原青年会）

狂言「節祭パチカイ」（西表民俗芸能保存会）

舞踊「南洋浜千鳥」（白浜青年会）

狂言「前乗りパチカイ」（祖納子ども会）

舞踊「スンバレ」（西表青年会）

波照間島の農業の伝承知識
―〈畑の民俗名称〉の事例から―

古谷野　洋子

石西礁湖の島々では、集落や海を越えた地に耕地を持ち、通って米などを作る〈通耕作〉が行われていた。耕地の限られた島に住む人々の耕地拡張である。しかし、波照間島は〈通耕作〉を行っていなかった。そのため島の中で完結した農業が営まれていた。稲作に向かない〈低い島〉ながら、同島では天水田でコメができた。しかし、雨に頼る天水田は収穫が不安定であり、同島の農耕の基本はあくまでも畑作であった。そのため高度の畑作の集約的栽培が行われていたと考えられる。

畑作では輪作と混作が行われていて、最も適した畑に、最も適した種類を組み合わせ栽培する必要があった。畑は耕土の深さ、土壌の種類、石の有無、畑の位置などによって分類され使いわけられた。このようにして分類された畑の名称を＜畑の民俗名称＞と呼ぶ。＜畑の民俗名称＞によって、何をどのように栽培すればよいかがわかるのである。

畑は位置的な分類から、①集落内の畑、②集落外の畑、③海岸近くの畑、に大まかに区分される。①はハコピテと呼ばれた（ピテは畑の意味）。近くにあるので管理が行き届き、すぐに収穫できるという利点がある。冬イモ（冬アガン）、バナナ、自家用の野菜を作った。

②の畑としてまず挙げられるのはトーピテである。トーとは窪んだ所を意味する。耕土が深く水はけのよいよく肥えた畑なのでトーピテは財産といわれた。アワとアカマミ、コムギとゲダイズのセットで２カ年サイクルの輪作が行われた。石ころがなかったので特にムギはトーピテに作ったという。

耕土の浅い畑がウガリピテとアザラピテであり、耕土が浅いためアワは丈の低い種類を植えた。ウガリピテは水はけがよくいつも乾燥していたのでアワとイモを栽培した。アワを蒔いた後、その間にイモを植えたのでアワの収穫後はイモ畑となった。特に小さなカナアガンはウガリピテで栽培した。アザラピテは耕土が浅く石の多い畑であり、アワ、イモ、アカマミを栽培した。

③の畑としてはメーラピテ、シィサバピテ、イションピテがある。メーラピテは砂と土の混じった肥えた畑であり、海水で消毒されているので害虫もいない。大根、玉ねぎ、イモなどを栽培した。シィサバピテ、イションピテも砂地の畑であり、水はけがいいのでイモの栽培に適した。海岸付近のイモ畑は長期間収穫できたので天然のイモの貯蔵庫として重宝された。

2018年度　竹富町史編集係業務日誌抄

4月23日　黒島編執筆者有志ミーティング。玻座真武先生のご霊前に『竹富町史だより』〈第40・41合併号〉を捧げる。

5月25日　沖縄県地域史協議会総会＆研修会（糸満市にて開催、職員１人出張）。「竹富町史「島じま編」の刊行について―『竹富町史　第七巻　波照間島』を中心に」報告。

6月10日　竹富町民球技大会（於・西表島東部、職員２人出張）。

6月19日　『竹富町史　第七巻　波照間島』書評執筆依頼。

6月24日　デンサ節大会（於・鳩間島、職員１人出張）。

6月30日　西表島祖納大宿家ヤータカビ取材（職員１人出張）。

7月２日　竹富町制施行70周年記念式典・祝賀会。

7月６日　『竹富町史　第七巻　波照間島』発刊記者会見（於・町長室）。

7月13日　第38回竹富町史編集委員会開催。

7月22日　黒島豊年祭取材（職員１人出張）。

8月６日　『八重山日報』に得能壽美氏による『竹富町史　第七巻　波照間島』の書評掲載。

8月８日　『新聞集成　Ⅶ』収録論文（石垣久雄氏、川平成雄氏、通事孝作氏、他）、コラム（玉城功一氏、他）執筆依頼。

8月18日　西表島編専門部会開催（職員２人出席）。
『沖縄タイムス』に平良勝保氏による『竹富町史　第七巻　波照間島』の書評掲載。

8月19日　『琉球新報』に照屋理氏による『竹富町史　第七巻　波照間島』の書評掲載。

9月１日　竹富町スポーツ少年団交流大会（職員２人）。

9月24日　『竹富町史だより』〈第42号〉刊行。

10月２日　石垣久雄氏原稿「新聞記事にみる竹富町の産業」受理。

10月10日　黒島編執筆者有志ミーティング（執筆者４人出席）。

10月16日　川平成雄氏原稿「西表島開発はなぜ〈幻〉に終わったか」受理。

10月26日　斜里町議会議員の「竹富町訪問及び行政視察」において、「竹富島の種子取祭」を解説。
午後より竹富島種子取祭に同行（職員１人出張）。

10月28日　竹富町体力測定（大原小学校にて開催、職員２人出張）。

11月４日　沖縄民俗学会、九州人類学研究会合同研究会の「小浜島結願祭視察」に同行。

11月９日　沖縄県地域史協議会研修（読谷にて開催、職員１人出張）。

11月18日　玉城功一氏、八重山毎日文化賞特別賞を受賞。編集委員会互助会より花束贈呈。

12月１日　第19回竹富町民俗芸能発表会（中野わいわいホール、職員１人出張）。

12月７日　第39回竹富町史編集委員会。

狂言「鍛冶工狂言」（2018年、小浜島結願祭）

第39回竹富町史編集委員会議事録

本議事録は、第39回竹富町史編集委員会を記録した音声資料に基づいて、竹富町史編集係がテキスト化し、それを石垣久雄が要約したものである。

第39回竹富町史編集委員会が下記の通り開催された。

日時　2018年12月７日（金）　午前10時～午後４時
場所　竹富町教育委員会（石垣市ＩＴ事業支援センター３階）

第39回竹富町史編集委員会の出席者は、竹富町史編集委員17人（石垣久雄委員長、里井洋一副委員長、新本光孝、石垣金星、西表隆夫、上江洲儀正、大城肇、大浜修、狩俣恵一、玉城功一、通事孝作、西里喜行、花井正光、花城正美、本田昭正、三木健、吉川安一）、仲田森和（竹富町教育長）、新盛勝一（社会文化課課長）、宜間正八（社会文化課課長補佐）、町史編集係３人（飯田泰彦、上地みどり、田邊俊介）の計23人。

編集委員会に先だって、竹富町史編集委員長・石垣久雄が、次のような挨拶を述べた。

「皆さん、おつかれさまです。年末のお忙しい中、委員の皆様がこのように元気に集えることをお互い喜びあいたいと思います。今年度の編集事業は、『竹富町史　第十一巻　資料編　新聞集成Ⅶ』を刊行することになっています。これについては、この後、事務局から報告があるかと思います。また、これまで私たちが取り組んできた「島じま編」シリーズも、西表島と黒島の２冊を残すのみとなりました。今日はこれらの進捗状況の報告が議題の中心になっています。皆で立派な竹富町史を編んでいきましょう」。

続いて、竹富町教育委員会教育長・仲田森和が、次のような挨拶を述べた。

「編集委員の皆様、おつかれさまです。竹富町教育委員会は組織の機構改革で、総務課、教育課、社会文化課の３課体制となりました。社会文化課が誕生して文化事業やスポーツ事業がスムーズに運営できるようになりました。９月24日には、竹富町制70周年を記念した芸能公演を、東京の国立劇場で大盛況のうちに終えることができました。町史編集事業におきましては、『竹富町史　第七巻　波照間島』が好評で、600部つくった本の在庫があと40冊ほどだと聞いております。今日１日、慎重審議をよろしくお願い申し上げます」。

その後、事務局より2018年度の経過報告があり、第39回竹富町史編集委員会が開催され、次の議題が審議された。

〈議題１〉『竹富町史　第十一巻　資料編　新聞集成Ⅶ』の進捗状況について
〈議題２〉『竹富町史　第八巻　西表島』の進捗状況について
〈議題３〉『竹富町史　第四巻　黒島』の進捗状況について
〈議題４〉発刊計画の見直しについて
〈議題５〉『郷友会編』について
〈議題６〉『自然編』〈ビジュアル編〉について
〈議題７〉その他

〈議題１〉『竹富町史　第十一巻　資料編　新聞集成Ⅶ』の進捗状況について

（事務局）

『竹富町史　第11巻　資料編　新聞集成　Ⅶ』（以下、『新聞集成Ⅶ』と略記）の進捗について、事務局が時系列に従って報告した。

第38回編集委員会（７月13日開催）で『新聞集成Ⅶ』の刊行が決定し、８月７日に石垣久雄、通事孝作、飯田泰彦の３人で会合を持つ。そこで本書の体裁と収録記事数との関係より、1964年８月から1966年12月の期間の記事を対象とすることになった。その後、地元紙から竹富町に関する全記事（2377件）を事務局で入力し、９月中にデータ化を済ませた。10月２日の会合では収録記事の取捨選択を行い、全体構成を整え、事務局による本格的な校正作業が始まった。

収録論文「総説」（通事孝作）、「新聞にみる竹富町の産業」（石垣久雄）、「西表開発はなぜ〈幻〉に終わったか」（川平成雄）などの原稿を受理し、目下編集作業中である。今後、原稿が整い次第、入札により印刷業者を決定し、2019年３月の発刊予定である。

〈議題２〉『竹富町史　第八巻　西表島』の進捗状況について　（石垣金星）

部会長・石垣金星により『竹富町史　第八巻　西表島』（以下、『西表島編』と略記）の進捗状況について、報告が行われた。第38回竹富町史編集委員会（７月13日開催）で、章立ての曖昧さから、構成を分冊にするのか１冊にまとめるのか、その他発刊計画などの再検討が求められていたが、第10回専門部会（８月18日開催）で議論された構成表（全18章、約770頁）を提示し、１冊構成で発刊する方向性が示された。新たに必要な原稿には、関係者各位に執筆を依頼した。

また、『西表島編』の自然分野の内容や、これと『竹富町史　自然編』との関係性について活発に議論された。その結果、『西表島編』では、主に西表島の自然と人の暮らしの関係に注目した記述を心がけることが再確認された。

原稿の提出について、発刊計画にしたがい、原則として今年度末を締め切りに設定した。事務局の負担を少なくするため、ひとまず専門部会のチェックと整理を経て事務局に原稿を提出する方法をとることになった。来年７月に全原稿を整え次第、８月からはゲラの制作に取り掛かる計画が報告された。

〈議題３〉『竹富町史　第四巻　黒島』の進捗状況について　（西表隆夫）

副部会長・西表隆夫により、『竹富町史　第四巻　黒島』（以下、『黒島編』と略記）の進捗状況について、「黒島編構成＆執筆者分担表」（第10次案）に基づいて報告された。

『黒島編』の取り組みは、毎月10日に執筆者の有志が集まり、提出原稿の読み合わせをはじめ、情報交換などを行っている。章立ても「第10次案」に落ち着きつつあり、現在、自然分野（第２章）と歴史分野近世期（第３章）を中心に、既に原稿が提出されており、本書の中核となる柱が明確になってきた。未提出原稿については、早めの提出を呼び掛けているところである。

現在、編集中の『新聞集成Ⅶ』には、黒島に関する記事が頻出するとのことなので、大いに参考とし、『黒島編』の編集に活用したい。

〈議題４〉発刊計画の見直しについて　（事務局）

このほど『西表島編』を１年先送りしたことに伴い、当面の発刊計画は次の表の通りに決定した。

年　度	刊　行　物	備　　考
2018（平成30）年度	第十一巻　資料編　新聞集成Ⅶ	1964年８月－1966年12月
2019年度	第十一巻　資料編　新聞集成Ⅷ	1967年１月－1969年12月（予定）
2020年度	第八巻　西表島	
2021年度	第四巻　黒　島	
2022年度	第十一巻　資料編　新聞集成Ⅸ	1970年１月－1972年12月（予定）

「島じま編」シリーズの発刊が全体的に遅れているため、各巻の発行が当初（1989年）計画した「竹富町史発刊計画」にそぐわなくなってきた。当初の計画を見直してみると、現在、資料編の『資料編　新聞集成』『資料編　近代』といったシリーズの冊数が増えていることや、『自然編』の２冊（ビジュアル編、自然環境編）が加わっていることが指摘できる。

また、２冊を予定する『自然編』は竹富町史の全体的な構想のなか、どのように位置づけるのかといった課題が残った。このような課題を踏まえた「計画案」を、来年度上半期の編集委員会（第40回）で事務局が提案することになった。

〈議題５〉『郷友会編』について　（狩俣恵一）

部会長・狩俣恵一により、『郷友会編』の取り組みについて、報告があった。第38回編集委員会で、各島から１人ずつ出して部会を構成することが決定し、委員各位に映像や写真も含めた資料収集をお願いしているところである。

まずは現在作成中である各島郷友会の連絡名簿を完成させたい。各島、各組織と連携し、本島や本土における連合会の動きにも目配りしながら、組織的でバランスの良い編集を目指している。部会は来年度７月前後に開催を予定している。

〈議題6〉『自然編』〈ビジュアル編〉について　（新本光孝）

部会長・新本光孝より『自然編』の取り組みについて報告された。『自然編』を編むに当たり、現在、竹富町の自然への注目度が高まっていることを自覚する必要が強調され、具体的な既刊の関連資料が丁寧に紹介された。これらを踏まえながら、〈自然環境編〉〈ビジュアル編〉の性格に合わせた編集が必須である。

また、西表島の大自然をアピールすると同時に、山のない「低い島」への目配りも利かせて、自然の多様性を前面に打ち出したい旨が述べられた。また、竹富町の自然は、暮らしと信仰との関係を抜きに語ることはできない面もあるので、御嶽・聖地とそれをとりまく環境からのアプローチも視野に入れる必要性が議論された。

波照間小学校沿革誌③

昭和六年九月二日
八月三十一日附ヲ以テ左記ノ通リ教員異同發令
波照間小學校尋准　島袋全利　登野城小學校尋准ヲ命ス四級下俸当分二八円給與
波照間小學校專訓　宮良キヨ　石垣校專訓ニ任ス七級下俸当分二八円給與
石垣校訓導　大濱重　波照間校訓導ニ任ス九給下俸当分三十八円
大濱校尋訓　石垣正吉　波照間校尋訓ニ任ス九級下俸給與
昭和六年十月十九日
三月三十一日附ヲ以テ年功加俸左記ノ通リ給與セラル

年額給與額	職名	氏名
二四円	訓導兼校長	大濱信光
二四円	訓導	安室孫亨

昭和六年十二月二十六日
年末賞與左記ノ通リ發令
賞與總額百拾八圓也

賞與額	職名	氏名	備考
三三円	訓導兼校長	大濱信光	
二〇円	訓導	宮良高清	
二八円	尋訓	石垣正吉	
一九円	訓導	大濱重	
一一円	尋訓	安室孫亨	
七円	代用教員	大嶺寛宏	

昭和七年一月十七日
昭和六年十二月三十一日附ヲ以テ左記ノ通リ増俸發令

増俸級	職名	氏名
七ノ下	訓導兼校長	大濱信光
九ノ上	訓導	宮良高清
九ノ下 三九円	〃	安室孫亨
九ノ上 四三円	〃	石垣正吉

昭和七年三月二十八日

卒業式擧行卒業児童数左ノ通リ

	性別	前年度以前	前年度	本年度	計	総計
尋常科三三回	男	二八四	二三	二五	三三二	六二七
	女	二六七	一五	一三	二九五	
高等科六回	男	四五	一四	一一	七〇	一〇八
	女	二五	七	六	三八	

受賞者数左記ノ通リ

	性別	成績受賞者	出席受賞者
尋常科	男	二五	四〇
	女	二一	三四
高等科	男	四	二
	女	二	二

昭和七年三月廿一日附ヲ以テ左記ノ通リ発令

波照間校訓導　宮良高清　任石垣尋常高等小學訓導　九級上　給與

波照間校訓導　安室孫亨　依願退職　九級上　給與

波照間校訓導　大濱重　依願退職　九級上當分四三円給與

登野城校訓導　宇江城正喜　任波照間校訓導　八級上当分五三円給與
與那國校訓導　宮良長次郎　任波照間校訓導　九級下当分三七円給與
仝年四月四日付ヲ発令　花城イワ　任波照間校代用教員　月俸弐拾五円給與
昭和七學年度本校経費豫算額

項目	給料	雜給	需要費	將勵費	修繕費	計	児童一人割当
昭和七學年度	二八四四	二四四	二二〇	六	一〇〇	二三三四	一三、〇七

昭和七年四月六日入學式擧行、新入児童数

尋常科	男	二六	計
	女	二三	四九
高等科	男	二〇	計
	女	七	二七

學級編制并教員配置表

種目	學級	學年	在籍児童 男	在籍児童 女	在籍児童 計	職名	氏名	月俸額
校本	第一學級	尋常科 第一学年	二六	二三	四九	代用教員	大嶺寛宏	二〇
	第二學級	仝 第二學年	二〇	一五	三五	代用教員	花城イワ	二五
	第三學級	仝 第三學年	一七	二四	四一	訓導	宮良長次郎	三七
	第四學級	仝 第四學年	一三	一四	二七	訓導	石垣正吉	四三
		第六學年	一二	一二	二四			
	第五學級	仝 第五學年	一八	一四	三二	訓導	大濱信光	六〇
	第六學級	高等科 第一學年	二〇	七	二七	訓導	宇江城正喜	五三
		第二學年	一六	四	二〇			
計	六		一四二	一一三	二五五	代用訓導	二人 四人	

昭和七年八月三十一日付ヲ以テ左記ノ通発令

波照間尋常高等小學校訓導兼校長大濱信光　任川平尋常高等小學校訓導兼校長七級下

川平尋常高等小學校訓導兼校長佐久眞長助　任波照間尋常高等小學校訓導兼校長七級上当分

六三円給與

昭和七年十二月三十一日付ヲ以テ職員年末賞與左記ノ通発令サル

賞與額	職名	氏名	賞與總額一一三円
三二円	訓導兼校長	佐久眞長助	
三一	訓導	宇江城正喜	
二五	仝	石垣正吉	
一六	仝	宮良長次郎	
一〇	代用教員	花城イワ	
九	仝	大嶺寛宏	

昭和八年一月十一日付ヲ以テ左記ノ通リ教員任用替ノ発令アリ

波照間校代用教員　花城イワ　任波照間校准訓導四級下当分二五円給與

波照間校代用教員　大嶺寛宏　任波照間校准訓導　四級下当分二三円給與

昭和八年三月二十五日

卒業式擧行　卒業児童数　左記ノ通リ

尋常科第三四回			高等科第七回	
男	女	計二四	男	女
一二	一二		一五	四
		計一九		

受賞者数左記ノ通リ

要項	尋常科		高等科	
性別	男	女	男	女
成績優秀受賞者	二五	一六	五	二
	四一		七	
出席受賞者	二三	三三	二	一
	五六		三	
模範児童受賞者	一	、	、	、

昭和八年四月三日

三月三十一日ヲ以テ左記ノ通リ発令アリ

波照間校訓導　石垣正吉　任石垣尋常高等小學校訓導九級上、当分四三円給與

與那國校訓導　崎山用行　任波照間尋常高等小學校訓導九級上、当分四二円給與

昭和八學年度本校経費豫算

項目	給料	雑給	需要費	將勵費	修繕費	計	児童一人割当
昭和八學年度	三〇二四円（※1）	一六五	二一八	六	五〇	三四六三	一三・七九円

昭和八年四月六日　入學式擧行　新入児童数左記ノ通リ

尋常科	男 二二	計 四一
	女 一九	
高等科	男 八	計 一三
	女 五	

昭和八年十二月年末賞與左記ノ通リ発令アリ

賞與額	職名	氏名
五〇円	訓導兼校長	佐久眞長助
二六	訓導	宇江城正喜
二五	〃	崎山用行
二二	〃	宮良長次郎
一四	〃	花城イワ
一四		大嶺寛宏

昭和九年三月三十一日付ヲ以テ左記ノ通教員異動アリ

波照間校訓導　宇江城正喜　任石垣尋常高等小学校訓導十一級俸当分五三円給與

石垣小学校訓導　城田信侑　任波照間尋常高等小学校訓導十一級俸給與

昭和九學年度予算

項目	給料	雜給	需用費	將勵費	修繕費	計	児童一人割当
昭和九年度	二九五五円	一六七	二一三	六	一	三三四二円	

昭和九年四月六日　入學式擧行

尋常科	男 二二	女 一五	計 三七
高等科	男 一四	女 一〇	計 二四

學級編制並ニ教員配置表

學級編制表　昭和八年四月現在

種別	學級	學年	在籍児童 男	在籍児童 女	在籍児童 計	職名	氏名	月俸額
本校	第一學級	尋常科 第一学年	二二	一九	四一	准訓導	大嶺寛宏	二三円
〃	第二學級	仝 第二學年	二四	二二	四六	准訓導	花城イワ	二五
〃	第三學級	仝 第三學年	一八	一二	三〇	訓導	崎山用行	四二
		第五學年	一三	一四	二七			
〃	第四學級	仝 第四學年	二一	一八	三九	訓導	宮良長次郎	三七
〃	第五學級	仝 第六學年	一八	一三	三一	訓導	佐久眞長助	六三
〃	第六學級	高等科 第一學年	八	五	一三	訓導	宇江城正喜	五三
		第二學年	一八	六	二四			
計			一四二	一〇九	二五一	訓導 四人 准訓導 二人		二四三

一、昭和八年九月十七日未曾有ノ大暴風ニ於テ本校舍全潰シ教室并ニ職員室ヲ左ノ通リ定ム

職員室　名石村　前田盛屋

尋一　東北　宮里屋

尋二　前村　東前加良屋
尋三　假教室
五
尋四　假教室
尋六　東南　勝連屋
高等科一　假教室
二

種別	學級	學年	在籍児童 男	在籍児童 女	在籍児童 計	職名	氏名	月俸額
本校	第一學級	尋常科 第一学年	二二	一五	三七	准訓導	大嶺寛宏	二三円
〃	第二學級	仝 第二學年	二二	一八	四〇	准訓導	花城イワ	二五
〃	第三學級	仝 第三學年	二〇	二〇	四〇	訓導	城田信侑	五五
〃	第四學級	第四學年 第六學年	一七 一三	一二 一四	二九 二七	訓導	崎山用行	四二
〃	第五學級	仝 第五學年	一七	二二	三九	訓導	宮良長次郎	三七
〃	第六學級	高等科 第一學年 第二學年	一五 六	九 四	二四 一〇	訓導	佐久眞長助	六三
計			一三二	一一四	二四六	訓導 准訓導	四人 二人	二四五円

昭和九年八月三一日付ヲ以テ左記ノ通リ発令サル
波照間小學校訓導　宮良長次郎　任與那國尋常高等小學校訓導十四級俸当分三十七円給與
波照間小學校准訓導　花城イワ　任與那國尋常高等小學校准訓導七級俸当分二十五円給與
小濱尋常高等小學校訓導　川田丈夫　任波照間尋常高等小學校訓導十四級俸給與
白良尋常高等小學校訓導　外間嘉　任波照間尋常高等小學校訓導十四級俸当分三十五円給與
昭和九年七月二十四日ヨリ校舎新築工事開始ス
昭和八年九月十七日ノ未曾有ノ大暴風ニ於テ倒潰シタル當校舎復舊工事ハ請負者辺渡文雄氏
　ニ決定シ復舊工事開始ス
昭和九年十二月十七日新築中ノ校舎木造ノ部三教室ニ左記學年収容ス
高等科一、二学年
尋常科四、六学年
仝　五学年

昭和九年十二月二十五日付年末賞與発令サル

賞與額	職名	氏名
四五円	訓導兼校長	佐久眞長助
二七	訓導	城田信侑
一六	訓導	崎山用行
五	仝上	川田丈夫
四	仝	外間　嘉

昭和拾年二月二日新築中ノ校舎復舊工事竣工ス

昭和十年二月八日落成式擧行ス

一、校舎總坪数百五拾坪四五

内

一、鉄筋コンクリート建　五十二坪九三

一、木造建平屋瓦葺　七十二坪五三

一、宿直、小使室　拾四坪二一

一、便所　五坪八八

一、渡廊下　四坪九〇

一、工事費総額金壱万五千八百五拾五円也

歳入之部

一、國庫補助金七千五百弐拾四円也

一、當字民負担

イ、現金四千二百七拾円也

ロ、就労人夫延人員　男　五四九〇人　女　五四六人　換算金四千六拾壱円也

歳入金計壱万五千八百五拾五円也

歳出之部

一、工事請負金壱万壱千七拾四円也

一、其ノ他金四千七百八拾壱円也

歳出合計金壱万五千八百五拾五円也

當校舎新築スルニツキ校地狭隘ナル為メ元校地ノ北方ノ畑地主人ノ寄附ニヨリ敷地ヲ拡張シテ建築シタルナリ

一、昭和十年三月三十一日付ヲ以テ左記ノ通リ発令サル

波照間尋常高等小學校訓導兼校長佐久眞長助　任新城尋常小學校訓導兼校長九級俸当分六八

円給與

黒島尋常高等小學校訓導兼校長石垣朝美　任波照間尋常高等小學校訓導兼校長八級俸給與

一、昭和十年四月六日　入學式並始業式擧行

1．新入児童

尋常科　男　二八

女　一三　計　四一

高等科　男　九

女　六　計　一五

合計　五六

2．學級編制並教員配置表

學級	學年	在籍児童 男	在籍児童 女	在籍児童 計	職名	氏名	月俸額
第一學級	尋常科 第一學年	二八	一三	四一	准訓導 訓導	大嶺寛宏 石垣朝英	二三 —
第二學級	〃 第二學年	二二	一三	三五	訓導	外間　嘉	三五
第三學級	尋常科 第三学年	二二	一六	三八	訓導	崎山用行	四五
第四學級	〃 第四學年 第五學年	二一 一七	一九 一二	四〇 二九	訓導	城田信侑	五八
第五學級	〃 第六學年	一八	二二	四〇	訓導	石垣朝英	八五
第六學級	高等科 第一學年 第二學年	九 一〇	六 七	一五 一七	訓導	川田丈夫	四〇
計		一四七	一〇八	二五五	訓　導 准訓導	五人 一人	二八五（四七・五〇）（※2）

一、昭和十年四月二十日

感恩報謝ノ念ヲ強調シ忠君愛國ノ精神ヲ助長スベク本日ヨリ毎朝禮前一齋ニ皇居遙拜ヲ行フ

一、昭和十年十二月四日

第二親王殿下御降誕奉祝式擧行、式後引續キ國旗行列並祝賀會ヲ催ス

一、昭和十一年一月十五日付ヲ以テ左記ノ通リ發令

波照間校訓導　崎山用行　給十二級俸　依願退職ヲ命ス

一、昭和十一年二月九日付ヲ以テ左記ノ通リ發令　宮良信友　波照間尋常高等小學校代用教員

ヲ命シ月俸金四拾円給與

一、昭和十一年三月二十七日卒業式擧行

尋常科卒業生　男一八　女二二　計四〇　高等科卒業生男一〇女六計一六

一、昭和十一年三月廿日

假校舍茅葺掘立小屋（十二坪）壱棟建設

一、昭和十一年三月三十一日付ヲ以テ左記ノ通リ發令

波照間校訓導　城田信侑　補登野城校訓導

登野城校訓導　石垣信弘　補波照間校訓導

女師專攻科卒業生　屋嘉部ハル　補波照間校訓導十四級俸給與

一、昭和十一年四月一日

本學年ヨリ一學級增加シテ七學級編制トナル

一、昭和十一年四月六日　入學式並始業式擧行

1. 新入児童

尋常科男二八女二〇計四八

合計八二

高等科男一六女一八計三四

2. 學級編制並教員配置表

學級	學年	在籍児童 男	在籍児童 女	在籍児童 計	職名	氏名	月俸額
第一學級	尋常科 第一学年	三〇	二一	五一	准訓導 訓導	大嶺寛宏 石垣朝英	二三 —
第二學級	第二學年	二五	一三	三八	訓導	外間　嘉	三五
第三學級	第三學年	二二	一三	三五	訓導	屋嘉部ハル	四〇
第四學級	尋常科 第四學年	二一	一六	三七	訓導	石垣信弘	五二
第五學級	第五學年	二二	一九	四一	代用教員 訓導	宮良信友 石垣信弘	四〇 —
第六學級	第六學年	一七	一二	二九	訓導	石垣朝英	八五
第七學級	高等科 第一學年 第二學年	一六 九	一八 六	三四 一五	訓導	川田丈夫	四〇
計		一六二	一一八	二八〇	訓　導 准訓導 代用教員	五人 一人 一人	三一五（四五・〇〇）

一、昭和十一年八月三十一日付ヲ以テ左記ノ通リ發令

波照間校訓導　外間嘉　補登野城校訓導

登野城校訓導　宮良長廣　補波照間校訓導

一、昭和十一年九月一日　學級編制並教員配置表

學級	學年	在籍児童 男	在籍児童 女	在籍児童 計	職名	氏名	月俸額
第一學級	尋常科 第一學年	三〇	二一	五一	准訓導 訓導	大嶺寛宏 石垣朝英	二三 —
第二學級	〃 第二學年	二五	一三	三八	訓導	宮良長廣	四三
第三學級	第三學年	二二	一三	三五	訓導	屋嘉部ハル	四〇
第四學級	第四學年	二一	一六	三七	訓導	石垣信弘	五二
第五學級	第五學年	二二	一九	四一	代用教員 訓導	宮良信友 石垣信弘	四〇 —
第六學級	第六學年	一七	一二	二九	訓導	石垣朝英	八五
第七學級	高等科 第一學年 第二學年	一五 九	一八 六	三三 一五	訓導	川田丈夫	四〇
計		一六一	一一八	二七九	訓導 准訓導 代用教員	五人 一人 一人	三二三（四六・一〇）

一、昭和十一年九月二十一日

波照間婦人會ヨリ大鏡壱面（價格二十円）寄贈アリ

一、昭和十一年十一月十二日

波照間青年團ヨリ鉄筋建鉄棒三組（價格金五拾円）寄贈アリ

一、昭和十一年十二月二十七日

波照間女子青年團ヨリ國旗掲揚台（鉄筋建）ノ寄贈アリ（見積價金弐拾円建設作業職員援助）

一、昭和十一年十二月二十八日

當字選出村會議員四人、字會評議員十四人、字總代二人、計二十人ノ篤志家ヨリ大国旗並旗竿、木綿縄等一揃（價格拾円）ノ寄贈アリ

一、昭和十一年十二月三十一日付ヲ以テ左記ノ通リ發令

給十三級俸　當分月四三円　訓導　川田丈夫

給七級俸　當分月二五円　准訓導　大嶺寛宏

一、昭和十二年一月一日

國旗掲揚式擧行自今祝祭日、毎月朔望弐回及其他國家的吉祥日ニ國旗掲揚式擧行ノ事ヲ定ム

一、昭和十二年三月二十三日
昭和十一學年度高等科卒業生西里安雄外十四名卒業記念トシテ校庭ニ池ヲ寄贈ス
一、昭和十二年三月三十日
假校舍茅葺掘立小屋（十二坪）壱棟建設
一、昭和十二年三月三十一日付ヲ以テ左記ノ通リ發令
波照間校訓導　川田丈夫　補登野城校訓導
一、昭和十二年四月一日
本學年度ヨリ一學級增加シテ八學級編制トナル
一、昭和十二年四月五日付ヲ以テ左記ノ通リ發令
前平田定七　波照間尋常高等小學校代用教員拜命月俸金弐拾五円給與
渡久山スミ　波照間尋常高等小學校代用教員拜命月俸金弐拾五円給與
一、昭和十二年四月六日　入學式並始業式擧行

1．新入児童数

尋常科	男 一三 女 二二	計 三五
高等科	男 一七 女 二二	計 二九
	合計六四	

2．學級編制並教員配置表

學級	學年	在籍児童 男	在籍児童 女	在籍児童 計	職名	氏名	月俸額
第一學級	尋常科 第一學年	一五	二三	三八	准訓導 訓導	大嶺寛宏 石垣信弘	二五 —
第二學級	第二學年	二八	二〇	四八	代用教員 訓導	渡久山スミ 宮良長廣	二五 —
第三學級	第三學年	二五	一四	三九	代用教員 訓導	前平田定七 屋嘉部ハル	二五 —
第四學級	尋常科 第四學年	二一	一三	三四	訓導	屋嘉部ハル	四〇
第五學級	〃 第五學年	二二	一六	三八	訓導	石垣信弘	五二
第六學級	〃 第六學年	二二	一九	四一	代用教員 訓導	宮良信友 石垣朝英	四〇 —
第七學級	高等科 第一學年	一七	一二	二九	訓導	石垣朝英	八五
第八學級	〃 第二學年	一三	一八	三一	訓導	宮良長廣	四三
計		一六三	一三五	二九八	訓導 准訓導 代用教員	四人 一人 三人	三三五 （四一・八七五）

一、昭和十二年八月三十一日付ヲ以テ左記ノ通リ發令
波照間校訓導兼校長　石垣朝英　補白良校訓導兼校長
新城校訓導兼校長　鈴木健三　補波照間校訓導兼校長
一、昭和十二年八月三十一日附ヲ以テ左記ノ通リ発令
沖縄縣公立小學校訓導　喜納惣盛　補波照間校訓導
一、昭和十二年十月三十一日附ヲ以テ左記ノ通リ發令
波照間校代用教員　宮良信友　補波照間校訓導
一、昭和十二年十月三十一日附左記ノ通リ發令
任沖縄縣公立小學校訓導本科正教員勤務
十三級俸當分四十三円給與
一、昭和十二年十一月十九日附左記ノ通リ發令
波照間校訓導　宮良信友　補登野城校訓導
一、昭和十二年十二月二十日左記ノ通リ發令
大山泰永　波照間校代用教員拜名（ママ）月俸二十五円給與
一、昭和十三年一月十九日附左記ノ通リ發令
給十一給俸　訓導　石垣信弘
一、昭和十三年二月十日
一、金四円也　國防献金（児童労力賃）
一、昭和十三年三月二日
縣知事藏重久閣下出征軍遺家族慰問傳達式、支廳長平良辰雄氏代理ニテ来島
一、昭和十三年三月十三日
字出身在戰線勇士ヘ慰問品發送（児童成績品）
金拾円也、慰問金トシテ發送（児童労力賃）
一、昭和十三年三月二十六日卒業式擧行
尋常科卒業生男二一女十九計四十名
高等科卒業生男　女　（※3）
一、昭和十三年三月三十一日附左記ノ通リ發令
波照間校訓導　石垣信弘　補竹富校訓導
波照間校訓導　屋嘉部ハル　補石垣校訓導
白良校訓導　譜久村正浩　石垣校訓導　譜久村エミ　補波照間校訓導
一、昭和十三年四月六日　入學式並始業式擧行

1．新入児童数

尋一	男 女		合計
高一	男 二二 女 一九	計 四〇	

2．學級編成並ニ教員配置表計

學級	學年	在籍児童数			職名	氏名	月俸額
		男	女	計			
第一學級	尋常科 第一學年	一七	二八	四五	准訓導 訓導	大嶺寛宏 喜納惣盛	二五 四〇
第二學級	〃 第二學年	一六	二二	三八	代用教員 訓導	渡久山スミ 譜久村正浩	二五 五二
第三學級	〃 第三學年	二八	一九	四七	代用教員 訓導	大山泰永 鈴木健三	二五 八〇
第四學級	〃 第四學年	二五	一四	三九	訓導	譜久村エミ	四〇
第五學級	〃 第五學年	二二	一三	三四	訓導	譜久村正浩	五二
第六學級	〃 第六學年	二二	一六	三八	訓導	宮良長廣	四三
第七學級	高等科 第一學年	二二	一九	四〇	訓導	喜納惣盛	四〇
第八學級	高等科 第二學年	一七	一一	二八	訓導	鈴木健三	八〇
計		一六七	一四二	三〇九	訓導 准訓導 代用教員	五名 一名 二名	三三〇

一、昭和十三年五月二十一日
除洲陥落ニツキ祝賀旗行列ヲナス

一、昭和十三年七月七日
支那事変勃發一周年記念日
1．戦没將兵ニ対スル感謝、出征軍人ノ武運長久祈願黙祷ヲナス（正午）
2．全児童金属菅蒐集ヲナス

一、昭和十三年七月十二日
波之上神社宮幣社昇格五十年記念献納金一銭宛取纏メ

一、昭和十三年七月二十一日

全校児童應召兵家庭ニ対シ勤労奉仕作業ヲナス

一、昭和十三年八月三十一日附左記ノ通リ發令

波照間代用教員　渡久山スミ　任與那國校代用教員、月俸二十六円給與

石垣政子　任波照間校代用教員、月俸二十六円給與

一、昭和十三年九月二日附左記ノ通リ發令

波照間校訓導　宮良長廣　命、臺湾臺南州出向

一、昭和十三年九月二十二日左記ノ通リ發令

大濱保元　任波照間校代用教員月俸二十八円給與

一、昭和十三年九月二十六日學級編成並ニ教員配置表

學級	學年	在籍児童数 男	在籍児童数 女	在籍児童数 計	職名	氏名	月俸額
第一學級	尋常科第一學年	一七	二六	四三	准訓導	大嶺寛宏	二八
					訓導	喜納惣盛	四〇
第二學級	同第二學年	一六	二三	三九	代用教員	石垣政子	二六
					訓導	譜久村正浩	五二
第三學級	同第三學年	二八	一九	四七	代用教員	大濱保元	二八
					訓導	鈴木健三	八〇
第四學級	同第四學年	二四	一三	三七	訓導	譜久村エミ	四〇
第五學級	同第五學年	二二	一三	三五	訓導	譜久村正浩	五二
第六學級	同第六學年	二一	一六	三七	代用教員	大山泰永	二八
					訓導	譜久村エミ	四〇
第七學級	高等科第一學年	二一	一九	四〇	訓導	喜納惣盛	四〇
第八學級	高等科第二學年	一七	一一	二八	訓導	鈴木健三	八〇
計		一六六	一四〇	三〇六	訓導	四名	
					准訓導	一名	
					代用教員	三名	三二二

一、昭和十三年十月二十八日

自午後一時至午後三時　祝賀旗行列　自午後四時至午後六時　祝賀会

一、昭和十三年十一月二十一日

支那事変出征兵遺家族慰問傳達式アリ、知事代理トシテ縣属浦崎賢保（※4）氏来島、家族二十六名出席

一、昭和十三年十二月十五日

養雞報國雞卵據出（代金献納）

一、昭和十三年十二月一日附左記ノ通リ発令

沖縄縣公立小學校長　鈴木健三　高等官八等ヲ以テ待遇セラル

一、昭和十四年一月五日
願ニ依リ退職ヲ命ス

現任校	轉任校	職名	氏名	俸給	附記
石垣	波照間	訓導	吉元仙永	五〇	
大濱校	〃	代用教員	稲福定蔵	二七	
波照間	大濱	訓導	喜納惣盛	四〇	
新卒	波照間	〃	照屋常吉	四五	

一、新入児童数

尋一	男 一九	女 一七	計 三六
高一	男 二一	女 一六	計 三七
合計七三			

2、学級編成並ニ教員配置表

學級	學年	在籍児童 男	在籍児童 女	在籍児童 計	職名	氏名	月俸額
第一學級	尋常科 第一學年	二一	二〇	四一	訓導	譜久村エミ	四三
第二學級	〃 第二學年	一七	二六	四三	訓導 代用教員	譜久村エミ 福仲　文	、二六
第三學級	〃 第三學年	一四	二一	三五	訓導 代用教員	譜久村エミ 石垣政子	、二六
第四學級	〃 第四學年	二八	一九	四七	訓導 代用教員	鈴木健三 西白保重雄	八〇 二五
第五學級	〃 第五學年	二三	一三	三六	訓導 代用教員	吉元仙永 喜友名盛行	、二八
第六學級	〃 第六學年	二一	一三	三四	訓導 代用教員	譜久村正浩 稲福定蔵	、二八
第七學級	高等科 第一學年	二一	一六	三七	訓導	譜久村正浩	五二
第八學級	〃 第二學年	二〇	一九	三九	訓導	吉元仙永	五〇
計		一六五	一四七	三一二	訓導 准訓導 代用教員	四 一 四	三五八

一、昭和十四年四月十三日附左ノ通リ発令
福仲文　波照間校代用教員ヲ命ス
近衛内閣総辞職、平沼騏一朗ニ大命降下
一、昭和十四年一月二十三日
麻疹大流行し、全校児童三〇七名の中一七二名欠席、全職員罹病児の家庭訪問をなす
一、昭和十四年一月二十四日
田福重勝氏より香奠返しとして金拾弗寄附あり
一、昭和十四年二月二十一日
時局認識學藝会を催す
一、昭和十四年二月二十六日
沖縄縣警察部松浦潔殿御来島
一、昭和十四年三月二日
清宮貴子内親王殿下御誕生
一、昭和十四年三月二十五日　卒業式擧行

尋常科卒業生	男　二一 女　一六	計　三七
高等科卒業生	男　一七 女　一一	計　二八

一、昭和十四年三月三十一日附左の通り發令
沖縄縣公立小學校准訓導　大嶺寛宏　七級俸給與
沖縄縣公立小學校准訓導　大嶺寛宏　小學校令施行規則第百二十六條第二號後段ニ依リ本職ヲ免ス
波照間校代用教員　大濱保元
同　大山泰永　月俸二六円給與
一、昭和十四年四月十七日附左ノ通リ発令
喜友名盛行　任波照間校代用教員、月俸二十八円給與
一、昭和十四年三月三十一日附左ノ通リ發令
稲福定蔵　沖縄縣公立尋常小學校准訓導ニ任ス　七級俸當分二十八円給與
沖縄縣公立尋常小學校准訓導　稲福定蔵　沖縄縣八重山郡波照間尋常高等小學校准訓導ニ補ス
一、昭和十四年四月三十日附左ノ通リ發令
西白保重雄　波照間校代用教員ヲ命ス　月俸二十五円給與
一、昭和十四年五月二十二日　青少年學徒ニ勅語ヲ賜フ
一、昭和十四年六月二十二日　波照間小學校防護團結成
一、昭和十四年六月三十日附左ノ通リ發令

波照間小學校校長兼訓導　鈴木健三　八級俸給與
波照間小學校代用教員　喜友名盛行　月俸三十円給與
波照間小學校代用教員　石垣政子　月俸二十八円給與

一、昭和十四年八月二十日
旭化學肥料株式会社波照間鑛業所並ニ請負師井上清太郎氏の寄贈により天水タンク建設（※5）

一、昭和十四年八月三十一日附左ノ通リ發令
波照間小學校代用教員喜友名盛行　願ニ依リ退職ヲ命ズ

一、昭和十四年九月十六日
青少年學徒ニ賜リタル勅語謄本拝戴

一、昭和十四年十一月二十一日
昭和十四年四月二十八日皇后陛下ヨリ賜ハリタル令旨（結核豫防ニ関スル）拝戴

一、昭和十四年九月　學級編成

學級	學年	児童数 男	児童数 女	児童数 計	職名	氏名	月俸額
第一學級	尋常科第一學年	二〇	二〇	四〇	訓導	譜久村エミ	四三
〃二學級	仝第二孝年	一六	二五	四一	代用訓導	福仲　文、譜久村エミ	二六
〃三〃〃	仝第三孝年	一四	二一	三五	代用教員訓導	石垣政子、吉本仙永（※6）	二六
〃四〃〃	仝第四孝年	二六	一九	四五	代用教員訓導	西白保重雄、譜久村正浩	二五
〃五〃〃	仝第五孝年	二二	一三	三五	訓導	照屋常吉	四五
〃六〃〃	仝第六孝年	二一	一三	三四	准訓導訓導	稲福定蔵　鈴木健三	二八　八五
〃七〃〃	高等科第一孝年	二一	一五	三六	訓導	譜久村正浩	五二
〃八〃〃	高等科第二孝年	一八	一九	三七	訓導	吉本仙永	五〇
計		一五八	一四五	三〇三	訓導　准訓導　代用教員	五人　一人　三人	三八二

一、昭和十四年九月一日ヲ第一回トシ以後毎月一日興亜奉公日トシテ設定サル

一、昭和十四年十月三日
軍人援護ニ関スル勅語謄本拝戴

一、昭和十四年十一月十六日

鈴木健三　叙正八位　昭和十四年三月一日
宮内大臣從二位勳一等　松平恒雄宣

一、昭和十四年十一月二十八日
昭和十四年三月三十一日付左記ノ通リ発令
沖縄縣公立小學校訓導　譜久村エミ　公立小學校教員加俸給與細則ニヨリ昭和十四年四月ヨリ年功加俸年額金弐拾四圓給與

一、昭和十四年十二月二十八日付左記ノ通リ発令
照屋常吉　沖縄縣八重山郡竹富村波照間青年學校助教諭ニ補ス　月手当七円給與　沖縄縣

一、昭和十四年十二月三十一日付左記ノ通リ発令
沖縄縣公立小學校訓導　譜久村正浩　十級俸當分五十七円給與

一、昭和十五年三月二十七日　卒業式並修業式擧行

尋常科卒業児童	男 二一 女 一三	計 三四
高等科卒業児童	男 一九 女 一九	計 三八

一、昭和十五年三月三十一日付左記ノ通リ教員異動発令

現任校	轉任校	職名	氏名	俸給	附記
波照間	國頭郡辺戸	訓導兼校長	鈴木健三	八〇	
仝	島尻郡玉城	訓導	吉元仙永	五〇	
仝	休職	訓導	照屋常吉	四五	東京高師入学
石垣校訓導	波照間	訓導兼校長	桃原用永	八〇	
石垣	仝	訓導	南風原英芳	五五	
新卒	仝	訓導	町　富吉	四八	

一、昭和十五年四月六日　入學式並始業式擧行

新入生	尋一	男 二七 女 二二	四九	高一	男 二〇 女 一二	三二	合計 八一

一、昭和十五年四月六日
學級編成並教員配置

學級	學年	在籍児童 男	在籍児童 女	在籍児童 計	職名	氏名	俸給額
第一學級	尋常科第一孝年	二七	二二	四九	訓導	譜久村エミ	四三
第二學級	尋常科第二孝年	一七	二〇	三七	代用教員	福仲　文	三〇
第三學級	尋三	一五	二四	三九	代用教員	石垣政子	三一
第四學級	尋四	一四	二一	三五	代用教員	西白保重雄	二七
第五學級	尋五	二七	二一	四八	准訓導	稲福定蔵	二八
第六學級	尋六	二二	一二	三四	訓導	南風原英芳	五五
第七學級	高一	二〇	一二	三二	訓導	町　富吉	四八
第八學級	高二	二〇	一五	三五	訓導	譜久村正浩	五七
計	八	一六二	一四七	三〇九	訓導 准訓導 代用教員	五人 一人 三人	三九九

一、昭和十五年三月三十一日付
當校附設波照間青年學校ニ專任助教諭トシテ石野盛正任命サル　月俸四十三円給與
一、仝年四月二十五日　靖國神社臨時大祭
一、仝年五月九日　當校内ニ気候觀測設置サル
一、昭和十五年六月十一日　波照間小學校後援會総會ヲ開催、會則ヲ成文化シ又組織ノ一部修正ヲナス
一、昭和十五年六月十九日
紀元二千六百年奉祝銃後奉公祈誓大會擧行
一、昭和十五年四月ヨリ寫本時間制定
一、仝　時局講演日（毎月七日）制定・學年當番制ニヨリ戰地ニ慰問文発送

一、仝年六月　學童用ゴム底布靴第一回配給
一、仝年七月七日　支那事変勃発第三周年記念日、記念式擧行　職員並ニ児童ヨリ恤兵金ヲ献納ス　慰問文発送
一、昭和十五年五月二十五日　波照間尋常高等小學校少年團結成（尋三以上）第一回総会開催
一、昭和十五年四月ヨリ紀元二千六百年記念一銭寄附　貯金開始（職員並児童一人毎月一銭宛）
　學校基金造成ノタメ
一、昭和十五年九月　第一回學童用絣綿布配給
一、昭和十五年六月三十日付左記ノ通リ増俸発令
　四九円　訓導　譜久村エミ
　三五円　准訓導　稲福定蔵
　三四円　代用教員　石垣政子
　三三円　仝　福仲　文
　三二円　仝　西白保重雄
一、昭和十五年九月二十七日
　少年囡隣保班結成
一、仝年十月四日　女子青年講座開講
一、昭和十五年九月二十七日
　日独伊三國條約締結ニ當リ詔書ト下シ賜フ
一、昭和十五年十月十九日　職員室ニ神棚ヲ備ヘ付ケ大麻ヲ奉齋ス
一、昭和十五年十月三十日　教育ニ関スル勅語御下賜五十年記念日ニ付休暇ヲ賜フ
　勅記（ママ）捧読式擧行
一、昭和十五年十一月十日　紀元二千六百年奉祝式並祝賀會擧行
　奉祝國旗行列（児童）　棒踊リ、舞踊（字）――　アリ
一、昭和十五年十二月五日　元老西園寺公望公國葬
一、昭和十五年十二月九日　校庭ノ北隅ニ一間半ニ七間ノ山羊舎建築　材料ハ學校林ヨリ伐リ出シ、尚児童ノ蒐集作業ニ依リ葺方ハ部落役員ノ勞力援助ニ依リ完成ス
一、昭和十六年一月一日　新年遥拜式擧行
一、仝年二月十一日　紀元節遥拜式擧行
　當日遥拜式後校庭ニ於テ祭壇ヲ設ケ健國祭ヲ擧行ス
一、昭和十六年三月一日　青年幹部常会開催シ翼賛青年聯盟支部発會ニ関シ協議ヲ遂ゲ翌三月二日發會式ヲ擧グ
一、仝年三月二十六日　昭和十五學年度卒業証書並ニ修業証書授與式ヲ擧行ス
　尋常科卒業生　男子二二人　女子一二人　計三四人
　高等科卒業生　男子二〇人　女子十五人　計三五人
一、昭和十六年四月七日　入學式並ニ始業式擧行
一、本學年度入學児童左記ノ通リ

初等科男子一七人女子一四人計三一人
高等科男子二二人女子一二人計三四人

一、昭和十六年二月十八日附勅令第百四十八號ヲ以テ國民學校令公布セラレ初等教育ノ劃期的改革ガ行ハレ、波照間尋常高等小學校ハ竹富村波照間國民學校ト改稱シ國民學校トシテノ新發足ヲナス

一、因ニ國民學校令ノ主要ナル條文三、四ヶ條摘錄スレバ左ノ通リナリ

國民學校令第一條

國民學校ハ皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的練成ヲ爲スヲ以テ目的トス

仝第二條

國民學校ニ初等科及高等科ヲ置ク但シ土地ノ情況ニ依リ初等科又ハ高等科ノミヲ置クコトヲ得

仝第四條

国民學校ノ教科ハ初等科及高等科ヲ通ジ　國民科　理数科　体錬科　藝能科トシ高等科ニアリテハ實業科ヲ加フ（各科ノ教科ハ之ヲ記スコトヲ省略ス）

仝第八條

保護者ハ児童ノ満六歳ニ達シタル日ノ翌日以後ニ於ケル最初ノ學年ノ始ヨリ満十四歳ニ達シタル日ノ属スル學年ノ終迄之ヲ國民學校ニ就學セシムルノ義務ヲ有ス（満八ヶ年間）

一、三月三十一日附ヲ以テ左記ノ通リ職員ノ移動發令アリタリ

波照間校訓導　譜久村正浩　補大濵校訓導
仝　譜久村エミ　補登野城校訓導
仝　稲福定蔵　補與那國校訓導
波照間校助教　石垣政子　依願退職
登野城校訓導　前新加太朗
仝　仲本トシ
新卒　訓導　與那覇政二
仝　訓導　高良慷祐
仝　助教　石垣　節　補波照間校

一、本學年度学級編制並ニ教員配置左ノ通リ

學級	學年	児童数 男	児童数 女	児童数 計	職名	氏名	俸給額
第一學級	初一	一七	一四	三一	訓導	前新加太郎	六五
第二學級	初二	二九	二一	五〇	訓導	仲本　トシ	四八
第三學級	初三	一七	一八	三五	助教 訓導	福仲　文 與那覇政二	三六 四八
第四學級	初四	二二	一六	三八	助教 訓導	石垣　節 南風原英芳	三二 六〇
第五學級	初五	一四	二二	三六	助教 訓導	西白保重雄 桃原用永	三五 八五
第六學級	初六	二七	一九	四六	訓導	高良慷祐	四八
第七學級	高一	二二	一二	三四	訓導	與那覇政二	四八
第八學級	高二	一八	一一	二九	訓導	南風原英芳	六〇
合計		一六六	一三三	二九九	訓導 助教	六人 三人	四五七

一、昭和十六年四月十六日

本學年度始メノ職員會ヲ開催シ本學年度学校経営等ニ関スル事項ヲ指示又ハ協議ス

一、本校教育ノ方針

國民學校令第一條

皇國ノ道ニ則リ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的錬成ヲナス

二、本學年度力点

（一）沖縄縣教育綱領ヲ体シソノ具体化ニ努力ス

一、國体観念ノ明徴

一、國語教育ノ徹底

一、國民体位ノ向上

一、科學教育ノ振興

一、實践力ノ強化

（二）校訓ニ新シク「和協」ノ項目ヲ加ヘ、校訓ノ具体化ニ努力

一、氣魄　げんきよく

一、規律　きまりよく

一、禮節　礼儀正しく

一、和協　心をあはせ力をあはせ

(三)　儀式、民族行事ヲ重視シ教授、訓育トノ連絡ヲ圖リ家庭化ヲハカル

三、錬成施設

一日ノ錬成行事

登校　自習　朝礼　授業　掃除　食事　書礼　授業　課外運動ヲ課業時間表ニ依リ規律正シク行フ

週中錬成行事

月　週訓發表

土　反省報告　因体訓練及作業

月中錬成行事

一日　國旗掲揚

二日　級長常會

五日　後援會費徴収

七日　時局講演日　慰問文　報國貯金

十四日三十日　部落内清掃日（児童公益作業）

十六日　小年團常會

更ニ月毎ニ機會毎ニ錬成計劃ヲ樹立シ月中行事中ニ織リ込ミ錬成ヲナス

四、教科研究部　五、校務分掌決定　六、其ノ他直チニ具体化スベキ事項ヲ協議決定ス

一、教室経営ニ関スル件

二、報國農場経営ニ関スル件

三、動物飼育ニ関スル件

四、校庭ノ美化、庭園ノ手入レノ件

五、校舎内外ノ保清訓練ノ件

六、青少年團ノ強化訓練ノ件

昭和十六年四月二十日

波照間校区青少年團ノ結成式並ニ青年學校昭和十六學年度入學及始業式擧行

仝年四月二十二日

児童ノ辨当携行ヲ実施ス

児童ノ規律的學校生活ヲナスコト、体位ノ向上並ニ食事作法ノ躾ノ強化ヲナシ併セテ家庭ノ職業ノ能率向上ヲ圖ルタメ食事時間ヲ設定ス

一、食事訓「箸取らば天地御代の御恵、君と親との御恩味へ」

一、挨拶「イタダキマス」

一、作法「御飯粒ヲ落サヌヤウニ、姿勢ヲ正シテ口音ヲ立テヌヤウニ」

一、挨拶「御馳走サマ」

仝年四月二十四日　児童身体検査ヲ施行ス

仝年四月二十九日

天長節遥拜式擧行　式後部落會主催ノ天長節奉祝會ヲ開催ス

仝年四月三十日

全校児童心身鍛錬春季遠足ヲナス

高那海岸ノ砂丘へ（午前九時三十分出発　午后三時歸校）

仝年五月一日　興亜奉公日

一、国旗掲揚

一、興國隊作業実施

五年以下　出征軍人家庭慰問奉仕作業

六年以上　報國農場開墾作業

一、青年興國隊作業　午前八時ヨリ開墾作業実施

仝年五月五日　端午ノ節句

一、民族行事ト教科トノ連絡ニ努カス特ニ低學年新教科書ノ取扱ニ注意シ左記ノ通リ実施ス

一、職員共同作製ノ「鯉のぼり」ヲ國旗掲揚台ノ竿ニ掲揚ス

二、玄関ニ藁人形（武者人形）ヲ飾ル　菖蒲ヲ生花。

三、桃太郎、金太郎、絵画貼出シ

四、全校児童ノ團体遊戯（鯉の瀧登り）

五、音樂工作圖画等各教科トノ連絡取扱ニ注意シ端午ノ節句ヲ意義アラシム

一、本日本年度竹富村壯丁檢査施行サル

仝年五月七日

清掃訓練ノ強化ヲナスタメ清掃作業分担区域ヲ三十二区域ニ分チ三年以上ヲ三十二組ニ分チ各組ニ組長ヲ置キ受持区域ノ清掃、雑巾ガケ　草刈リ　塵拾ヒ作業ヲナサシム　時折受時区域ヲ変更スルコトアリ

仝年五月八日

一、健康増進運動期間最終日ニ付朝禮ニ於テ令旨奉読式擧行シ更ニ衛生講話ヲ行フ

一、本日ヨリ本學年度家庭訪問ヲ開始ス

特ニ左記諸点ニ留意シテ訪問ヲナス

一、学籍簿ノ家庭欄調査ノ件

一、家庭教育振興資料調査ノ件

一、生活指導資料調査ノ件

仝年五月十七日

波上宮例祭ニ就キ遥拜式ヲナシ講話ヲナス

仝年五月二十一日

晝食後ニ晝礼時間ヲ設定ス

児童ノ團体的規律的態度ノ強化ヲ圖ルタメ晝食後ニ於ケル弛ミガチノ氣分ヲ引キ締メ左ノ通リ晝礼ヲ行フ

一、集合　二、護國ノ英靈ニ感謝シ皇軍將兵武運長久祈念　三、挨拶（コンニチハ）
四、訓話又ハ注意、　五、体操（ラジオ体操第二）　六、各教室へ行進

仝年五月二十二日

青少年學徒ニ賜ハリタル勅語御下賜記念日

一、勅語奉読式擧行

一、閲團分列式　講評ノ順ニ依リ囚体訓練ヲナシ

一、分囚別総會ヲ開ク

仝年五月二十二日　海軍記念日

一、左記ニ依リ記念式ヲ擧行ス

一、國旗　海軍旗Z旗ヲ掲揚ス

一、宮城遥拜

一、君ガ代奉唱

一、祈念（護國ノ英靈ニ感謝シ皇軍將兵ノ武運長久祈念）

一、記念講話

一、朗読　日本海〃戰（初六）

一、合唱（海軍記念日）

一、國旗　海軍旗　Z旗降下

一、閉式

一、尚本日児童ノ蛔虫駆除ヲ実施ス

一、寄生虫ニ関スル衛生講話ヲナシ全児童ニ海人草ヲ服用セシム

一、三日間ニ亘リ調査ノ結果排虫人員九五人排虫数ハ三三二匹ナリ

仝年六月一日　興亜奉公日（前月通リ）

本日ヨリ全校児童ニ対シ一齋ニ履物訓練実施　登校下校ハ必ラズ履物ヲ履クコト（草履、下駄、靴、ズック）

廊下側ニキレイニ揃ヘテ教室ヘ入ルコト

仝年六月五日　各教室ニ神棚ヲ奉齋ス

國体観念ヲ明徴ニシ國民精神ノ昂揚ヲ期スルタメ　敬神ノ躾ノ強化ノタメ各教室ニ神棚ヲ奉齋シ、毎朝オ供ヘ禮拜ヲナス

仝年六月十日　代議士　漢那憲和氏来校

一、四年以上ノ児童ニ対シ「海軍ニ関スル講話」ヲナス

一、本日「時の記念日」ニ付記念講話ヲナシ各教室ニ時計ノ模型ヲ設ケ時計ノ見方指導ヲナス

仝年六月二十一日　校庭ニ相撲場ヲ設ク

仝年七月七日　支那事変記念日　七夕

一、支那事変四周年記念式擧行

一、星祭り（七夕行事教科トノ連絡施設）

一、恤兵献金ヲナス

仝年七月九日　校内運針競技會開催

藝能科裁縫ノ基本的技能運針ノ技能向上ヲハカルタメ又ハ八月中ニ行ハレル郡下各國民学校ノ運針競技會ノ準備ノタメ校内運針競技會ヲ催シ好成績ヲ収ム

仝年七月十四日　豫テ註文ノ大太鼓一個到着ス

仝年八月十七日

郡下青年競技會ニ本校リレー選手派遣　初等科二等　高等科三等ノ好成績ヲ収ム

仝年九月一日

助教福仲文　助教講習受講ノタメ出張（期間三ヶ月）ニ付初等科三年ハ桃原校長学級担任ス

仝年九月五日

青少年團樹立式擧行引続キ部落内大行進ヲナス

仝年九月二十一日　日蝕観測

本日八重山郡一帯ニ於テ太陽ノ皆既食ヲ見ルコトヲ得ルヲ以テ本校ニ於テハ豫テ児童ヲシテ観測上ノ豫備知識ヲ教ヘ本日各在所ニ於テソノ観測ヲナサシム

午后零時二十分頃ヨリ乳ガラス又ハ煤ガラスニ現ハレタ太陽ハ次第ニ虧ケ始メ午后一時ニハ半月仝二十分頃三日月午后一時四十七分―五十分食甚トナル黒イ太陽ノ神秘ヲ見ル

午后一時五十一分生光ガ見エ次第ニ元ノ太陽ノ形ニ変ッテ行ク

大自然ノ現象ノ霊妙不可思議ノ中ニモ規則正シキ一定ノ法則ノ下ニ運行スル天体ノ研究ニ島民全体ガ驚異ト喜ビノ眼ヲ輝カス

仝九月二十五日

本日ヨリ三日間ニ亘リ左記ニ依リ母姉講習會ヲ開催シ國民學校ノ趣旨徹底並ニ教科書ニ関スル取扱ノ大要ヲ得シメ家庭教育ノ振興ヲ期ス

一、毎日午后一時ヨリ三時間

一、集礼　宮城遥拜　挨拶　体操（ラヂオ体操第一）

一、第一時限　國民科

一、第二時限　理数科

一、第三時限　藝能科

初等科一年並ニ初等科二年ノ教科書ニ依ル

一、講師

桃原校長　家庭教育、國民學校趣旨徹底

前新訓導　初等科一年ノ教科書ニ就キ

仲本訓導　初等科二年ノ教科書ニ就キ取扱ノ実際ヲナス

仝年十月二日　増築校舎地鎮祭並ニ着工式挙行

学級増加ト共ニ從来ノ校舎ハ教室不足ヲ来シ二学級ノ假校舎ニテ授業ヲ続ケテ来タガ先般部落ノ学校後援會ニ於テ増築新校舎建設ノ議決ヲナシソノ材料蒐集準備整ヒタルタメ本日吉日ヲトシ地鎮祭並ニ着工式擧行セラル

仝年十月十日　國民学校青年学校青年囚聯合陸上大運動會開催

正午前八時入場式引続キ運動競技午后四時三十分閉会式終了
本日健康優良児童トシテ左記二人ニ対シ表彰狀（健康優良児童表彰会ヨリ）ヲ傳達ス
男子　前野幸助　女子　西田原　文
仝年十一月三日
一、明治節遥拜式擧行
一、体操會開催（ラジオ体操第一、第二、第三実施）
一、奉祝相撲大會（男子青年團）
一、明治節奉祝會并ニ新校舍落成祝賀會ヲ開催ス
仝年十一月八日　飲料用水タンク設備ス
児童ノ飲料用水ノ不衛生的ナルニ鑑ミ飲料用水タンクノ補助申請ヲナシ認可ヲ見タルヲ以テ
新校舍ノ南側ニ新ニ水タンクヲ新設中ノトコロ本日竣工ス
仝年十一月十四日　銃剣術防具到着ス
在郷軍人青年團青年学校合同ニテ銃剣術用防具註文中ノ處本日到着、学校ニ保管シ必要ニ應
ジテ使用スルコトトス
仝年十一月二十二日
青少年團記念日ニ付左記ニ依リ勤労動員ヲ行フ
午前八時二十分集合
一、國旗掲揚　一、宮城遥拜　一、祈念　一、令旨奉読　一、訓辞　一、愛國行進曲合唱
一、勤労奉仕作業
作業―青年團ハ道路修理作業　少年團ハ軍人家庭奉仕薪取リ作業
午前中ニ動員ヲ終了シ退散ス
仝年十二月一日　防火デー
本日學校防護團規定ニ基キ防護團ヲ結成ス
仝年十二月四日　児童ノ蛔虫駆除ヲ実施シ好成績ヲ挙グ
仝年十二月八日
米英ニ対シ宣戰ノ詔勅渙発セラレ支那事変ハ大東亜戰争ノ中ニ抱括シテ呼稱サル
一億國民感激ノ涙ト共ニ米英撃滅ヲ誓フ
本日帝國海軍ハハワイ眞珠湾ヲ奇襲シ米國太平洋艦隊ヲ撃滅ス　グワム島占領　フィリッピ
ン爆撃　香港爆撃敢行　皇軍マレーニ敵前上陸
毎月八日ヲ大詔奉戴日ト定メ毎月此ノ日ハ新ナル感激ト共ニ米英撃滅必勝ノ信念ヲ強化ス
仝年十二月十三日
陸軍兵長西本比田真次ノ村葬執行サル
中支戰線ニ於テ名譽ノ戰死ヲ遂ゲラレタ西本比田真次ノ遺骨ハ昨日到着、本日午後三時本校
ニ於テ莊嚴ナル村葬執行セラレタリ
仝年十二月十七日
高良訓導現役入營出發ニ付告別式挙行全校児童歓送ヲナシ壯途ヲ祝ス

仝年十二月十八日
太刀洗出発―台湾へ向フ重爆撃機一機天氣ノ都合ニ依リ僚機ヲ失ヒ波照間島西南方ニ當ル原野ニ不時着ヲナス
全校職員児童、部落警防團員総動員ニテ現場へ急行シ救助ヲナス
遭難飛行士　隊長井上中尉以下八人部落事務所ニ収容シ婦人會　女子青年團幹部在郷軍人ソノ世話並ニ飛行機搭載部品ノ保管警戒ニ當ル
仝年十二月十九日
一、井上中尉一行　航空機ニ関スル講話ヲナス
一、飛行機具ノ展覧並ニ説明ヲナス
昭和十七年一月八日　大詔奉戴日
一、校庭ニ於テ米英撃滅部落民大會ヲ開催シ挙ッテ米英撃滅ヲ誓フ
一、児童ノ書初展覧会ヲ開催シ保護者ニ展覧ス
一、在郷軍人ハ校庭ニ於テ銃剣術ノ會ヲ催シ士氣ヲ鼓舞ス
昭和十七年一月十三日
学校防護團ノ演習ヲ実施ス
仝年一月十七日
國防婦人會ノ統一組織的活動ヲ活發ナラシムルタメ総會ヲ開催シ會則ヲ修正シ會長ノ選任ヲナシ更ニ左記申シ合セヲナス
申シ合セ事項
大詔奉戴日行事トシテ各部落オ嶽ニ於テ皇軍ノ武運長久祈願祭ヲ行フコト
来賓仲本信幸氏ヨリ迷信又ハ弊風打破ニ関スル講演アリ
余興トシテ児童ノ学藝四、五点並ニ紙芝居ヲ観覧セシム
仝年一月二十六日
西島本加那氏ヨリ亡母ノ香奠返シトシテ金拾五円学校備品費トシテ寄附ヲ受ク
仝年二月八日　第二回大詔奉戴日
（一）午前五時半不時呼集訓練実施
（二）必勝祈願皇軍將兵武運長久祈願祭ヲオ嶽前ニテ行フ祈願祭順序左ノ通リ
一、宮城遥拜
一、皇太神宮遥拜
一、君ガ代奉唱
一、オ嶽拜禮
一、祈願文朗読
一、愛國行進曲合唱
一、司會者挨拶
一、退散
（三）各戸國旗掲揚

（四）朝礼ニ於テ詔書奉読式挙行
（五）出征軍人家庭奉仕作業　（六）戦没軍人墓参
（七）慰問文發送　（八）報國貯金実施
毎月大詔奉戴日毎ニ繰返シ実行ス
仝年二月九日　國民学校児童職員國民貯蓄組合ヲ結成ス
仝年二月十一日　紀元節遥拝式挙行　遥拝式後波照間國民学校々歌發表ヲナス
歌詞　大阪朝日新聞記者　宮良高夫氏作
作曲　登野城國民学校訓導　糸洲長良氏作
歌詞ハ左記ノ通リ
波照間國民学校々歌

△新日本の窓あけて
　ひらける南洋々と
流れ　豊かな　黒潮に
　惠あふれる　波照間よ
このよき島に　生れ来て
　学ぶ我等の幸多し
△青海原の　波しぶき
　若き希望の花咲きて
あゝ美はしき　学び舎よ
　心あかるく　気も清く
知徳を磨き　身を鍛ふ
　師弟　和楽の我が母校
△皇國の善き民ぞ
　強く　正しく　睦みあひ
詔勅　畏み　報國の
　至誠心の　帆をあげて
われらは行かん　まつしぐら
　萬歳　萬歳　波照間校
引続キ必勝祈願部落民大會開催ス
午後部落會主催紀元節奉祝會ヲ開催ス
仝年二月十七日　シンガポール陥落■号外到着ス
直チニ奉祝行事ヲ協議シ翌十八日ハ國旗掲揚、奉祝大行進ヲナシ午后一時ヨリ奉祝祝賀会ヲ
　開催ス
仝年三月三日　桃ノ節句
行事ト教科ノ連絡ヲハカリ左記ノ通リ行事ヲ行フ

一、色紙制作ノオ雛様ヲカザリ雛壇ヲ設ク
一、雛祭リノ講話ヲナス
一、藝能科音樂「ヒナマツリ」ヲ取扱ヒ
本日縣下中等学校入学試験行ハル
本校ヨリ十五人ノ受験生中左記ノ通リ合格ス
師範学校　仲底長善
第一中学校　田福安栄
縣立一高女　島村ヤス
八重山農学校　上里真昭　新盛良盛
大泊勇一　新城修
八重山中学校　上里哲夫　新城保
仝年三月六日　地久節
「母の會」ヲ催シ皇后陛下ノ御徳ヲ仰ギ皇國ノ母トシテ少国民育成ノ決意ヲ固ム
仝年三月八日　第三回大詔奉戴日行事（前月通リ）実施
仝年三月十日　陸軍記念日
大東亜戰爭下陸軍記念日ヲ迎フルニ當リ青年團ノ非常召集ヲナシ午前三時ヨリ午前六時迄攻防演習ヲ実施シ戰時下ノ青年ノ士氣ヲ鼓舞シ非常ニ際シテ應ズルノ心構ヲ強化ス
仝年三月二十日　國民学校、青年学校終業式
昭和十六學年度修了證書並ニ修業証書授與式挙行
本學年度修了児童左記ノ通リ
高等科男子一八人　女子一一人　計二九人
初等科男子二七人　女子一九人　計四六人

昭和十七年四月一日　入學式並ニ始業式擧行
仝年四月四日
三月三十一日附左記ノ通リ職員ノ移動發令ノ通知アリ
波照間訓導　南風原英芳　補宮良校訓導
波照間校助教　福仲　文　補白保校助教
訓導　仲本トシ　依願退職
登野城訓導　竹原孫恭
大濱校訓導　竹原　房
新卒　訓導　宮平　茂　補波照間校訓導
仝年四月八日　第四回大詔奉戴日（前月通リ実施ス）
仝年四月二十一日　職務會開催
本校本學年度努力点左ノ通リ指示又ハ協議決定
一、縣教育網領ノ具体化

國体観念の明徴
國語教育の徹底
國民体位の向上
科學教育の振興
実践力の強化

一、本校力点
体位の向上　体錬科重視　課外運動ノ強化　衛生訓練　食事訓練　体育施設ノ充実
実践力の強化　生活化マデ
発表能力養成　標準語勵行　環境ノ整備　教室、校庭、部落ノ教育的環境ヘ
時局教育ノ徹底

仝年四月二十二日　本學年度職員児童身体檢査ヲ行フ
仝年四月二十五日　靖國神社臨時大祭ニツキ休業ヲ仰セ出サル

本校本學年度学級編制並ニ教員配置左ノ通リ

学級	学年	児童数 男	児童数 女	児童数 計	職名	氏名	俸給額
第一學級	初一	二二	一九	四一	訓導 助教	前新加太郎 石垣　節	六五円 三二円
第二學級	初二	一七	一四	三一	訓導	前新加太郎	六五〃
第三學級	初三	二八	二〇	四八	訓導 助教	與那覇政二 西白保重雄	四八〃 三五〃
第四學級	初四	一七	一八	三五	訓導	竹原　房	五七〃
第五學級	初五	一五	二一	三六	訓導 助教	桃原用永 米盛　富	八五〃 三二〃
第六學級	初六	一四	二一	三五	訓導	竹原孫恭	六三〃
第七學級	高女	、	三〇	三〇	訓導	宮平　茂	四八〃
第八學級	高男	四五	、	四五	訓導	與那覇政二	四八〃
合計		一五八	一四三	三〇一	訓導 助教	六人 三人	三六六〃 九九〃

新卒助教　米盛富　四月十八日附發令波照間校助教ニ補セラル
仝年四月二十八日
四月三十日ヲ期シ衆議院議員選挙施行セラルニ當リ本村ニ於ケル繰上ゲ投票日ハ四月二十八

日ト決定セラレ本日本校ニ於テ投票行ハル
仝年四月二十九日　天長節遥拝式擧行
式後引続キ青少年團入退團式挙行
午后一時ヨリ部落會主催天長節奉祝祝賀会開催
仝年四月三十日
縣視学宇座信篤去ル四月二十七日ヨリ本日ニ至ルマデ学校並ニ部落内ヲ視察シ左記ノ通リ講評ヲナス
一、地理的不便甚ダシキモ克ク職員和衷一体トナリ
精神的ニ地理的不便ヲ克服シテ学校経営ニ當ルヲ感謝ス
二、職員ハ不断ノ研究ニ力メラレタシ（教材研究、教法研究）
三、教壇教育ト社會教育トノ連絡ヲ考慮セラレ、社会教育ニ依リ学校教育ノ價値向上ニ努メラレタシ
教壇教育ハ盡サレテヰテモ或程度以上効果ノ挙ガラザル点アリ教壇教育ヲ社會教育ニヨリ一層効果ヲ挙ゲラレタシ
殊ニ母トナルベキ婦人ノ教育中デモ育児ノ知識ノ向上、生活改善、衛生上ノ問題等ニ力ヲ盡サレタシ
四、農村教育ハソノ村ノ実業教育カラ
五、毎日ノ学校ニ於ケル努力ハ児童ノ躾ノ上ニアラハレタ点カラ見テウレシイ
六、校長ヲ中心トシテ常ニ計劃的ニ学校運営ガナサレテヰテウレシイ
仝年五月八日　第五回大詔奉戴日（前月通リ実施ス）
五月一日ヨリ本日ニ至ル八日間健民運動期間行事施設ヲナス
一、令旨奉読式挙行（五月一日）
一、体力錬成子供大會全校遠足（五月五日）
一、婦人会総會並ニ講演会
講演一、皇國民族精神昂揚
一、母子保健ニ関スル知識
一、國民生活ノ合理化
一、育児ノ知識
仝年五月十二日　本學年度家庭訪問開始
仝年五月十五日　青年動員行ハル
青年学校三年以上　石野助教諭ノ引率ノモトニ〇〇方面ニ対スル奉仕作業ニ出発ス
仝年五月十七日　波上宮例祭ニツキ遥拝式挙行
仝年五月二十七日　海軍記念日
一、記念式挙行
一、祈念心身鍛錬運動競技會開催
仝年五月二十八日

石垣國民學校高等科旅行隊百二十人到着
引率教員　糸数用著　喜舎場永勝　石垣信良　亀川安兵衛　銘刈ヒデ　宮良キミ
本校ニ於テハ豫テ手配ヲシテ旅行隊ヲ歓迎ス
男子青年團　宿泊所準備（高等科三教室）
女子青年團幹部　炊事ノ加勢
婦人會員　茶菓ヲ準備シ接待ス
部落會主催旅行隊引率教員ノ歓迎会ヲ催ス
翌二十九日午前九時無事帰途ニツク
仝年六月八日　第六回大詔奉戴日（前月通リ実施ス）
仝年六月二十日
石垣校ニ於テ飼育中ノ猿一匹、児童ノ観察ニ供スベク本日ヨリ七月二十迄當校ニ於テ飼育ス
仝年六月二十三日
学校醫大濵當忠氏児童身体ノ檢査ヲ行ヒ左記ノ点ニツキ講評アリ
一、児童生徒ノ歯ノ丈夫サハ他ニ見ラレヌ程良イ
二、トラホーム児童ハ特ニ多イ様ニ見ラレル治療方法ヲ講ズルノ要アリ
仝年六月二十五日
皇太后陛下御誕晨記念日ニツキ皇太后陛下ノ御徳ヲ偲ヒ奉ルタメ國旗掲揚、講話ヲナス
仝年七月七日　七夕
行事ト教科ノ連絡ニ注意シテ七夕ノオカザリヲナシ尚支那事変勃発記念日ニ當ルヲ以テ講話ヲナス
仝年七月八日　第七回大詔奉戴日（前月通リ実施）
仝年七月十五日　校内運針競技會開催
仝年七月二十日　海ノ記念日ニツキ祈念講演ヲナス
本日第一学期修業式挙行
仝年八月三十一日
本日ヨリ三十一日迄、夏季心身鍛錬特別施設トシテ左記訓練ヲ行フ
一、寫本　一、授業　一、作業　一、強歩訓練
仝年八月二十六日
戰没軍人弔慰並ニ遺族慰問ノ爲職員全員西本比田家越地家訪問ヲナス
仝年八月二十七日
本校ニラジオヲ設置ス　経費百拾円也
向後電池消耗毎ニ註文取替　維持ス
本日午後五時半ヨリ聴取ス
アンテナ用ポール（竹）二本　上盛氏寄贈
仝年八月二十八日
本日午后三時ヨリ家庭防火郡ノ演習ヲ校庭ニ於テ実施ス

仝年九月三日
大日本婦人會竹富村支部波照間班結成準備委員会開催、九月七日結成式ヲ挙行ス
仝年九月八日　第九回大詔奉戴日行事実施
仝年九月十五日　満州健國十周年記念奉祝行事ヲ行フ
仝年九月二十一日　航空日
一、少國民ノ航空ニ対スル知識思想涵養ノタメ航空ニ関スル講話ヲナス
一、グライダー（模型航空機）競翔會ヲ催ス
一等　高二　吉村
二等　仝上　垣本　茂
三等　仝上　田盛ハツ
少國民ノ空ヘノ希望ガ次第ニ高マル様ニ思ハレル、校庭ハ多数ノグライダー、乱舞ニ一時飛行場ノ観ヲ呈ス
仝年十月三日　軍人援護ニ関スル勅語御下賜記念日
記念行事　一、勅語奉読式挙行
一、皇后陛下御歌奉誦及謹寫
一、慰問文発送　一、慰問奉仕作業実施
仝年十月八日　第一〇回大詔奉戴日行事実施
仝年十月十日　陸上運動競技會開催
仝年十月十三日　戊申詔書御下賜記念日ニツキ奉読式挙行
郡下國民学校児童運針競技會ニ参加ノタメ
本校選手三人出発
東迎スエ　上里キヨ　島村フミ　天氣ノ都合ニ依リ小濱迄到リ期日ニ間ニ合ハズシテ参加デキズシテ帰ル
仝年十月十六日　靖國神社臨時大祭ニツキ休日ヲ仰セ出サレ、午前十時十五分ヲ期シ在所ニ於テ靖國ノ英霊ニ感謝慰霊ノ祈念ヲナス
仝年十一月三日　明治節遥拝式挙行
児童作品展覧会（習字　図画　工作　手藝裁縫）
健民大會（ラヂオ体操第一、第二、第三実施）午后部落會主催奉祝々賀會ヲ開催ス
仝年十一月八日　第一一回大詔奉戴日行事実施
仝年十二月一日　防火日
一、学校防護團ニ関スル講話
一、防空ニ関スル一般知識教授
一、学校防護團ノ編成替ヲナシ演習ヲ実施ス
一、防火班ノ用具（火叩キ　ツルベ）ヲ作製シ設備ス
仝年十二月三日
宮平訓導入営ノタメ本日出発ニツキ告別式ヲ挙行シ盛大ナル歓送ヲナス

仝年十二月五日
父兄懇談會　保護會総會ヲ開催ス
保護會ニ於テ毎月會費十銭ノトコロヲ一月以降毎月二十銭増額シ学校後援ヲ強化ス
仝年十二月八日　大東亜戰争一周年記念日
記念行事ヲ左記ノ通リ実施ス
一、午前六時　朝ノ清掃作業（各部落オ嶽）
一、午前七時　必勝祈願祭（仝上）
一、午前八時二十分　詔書奉読式挙行　部落民参加
一、午前十一時五十九分　必勝祈念（在所ニ於テ）
一、児童ハ墓参　職員ハ慰霊ノタメ家庭訪問
一、奉仕作業（軍人家庭ニ対シ薪取リヲナス）
一、報國貯金（従来ノ三倍額）
一、慰問文　全校児童発送ス
更ニ聖戰一周年記念事業トシテ本校本門前ノ道路ノ改修美化作業ヲ男女青少年團ニテ三日ニ亘リ実施シ面目ヲ改ル
仝年十二月十五日
島村静枝氏ヨリ亡夫啓介ノ香奠返シトシテ金弐拾円也寄贈アリ
仝年十二月二十一日
大日本化学工業研究所ヨリヤラブノ実採集ノ依頼ヲ受ケ児童ノ課外作業ニヨリ採集発送セシトコロ本日代金弐百参拾七円受領
学校備品費ノ中ニ繰リ入ル
仝年十二月二十四日　第二学期終業式挙行
二十五日ヨリ一月五日迄冬季心身鍛錬期間ニツキ心身鍛錬要項ヲ定メ因体的規律的ニ実施セシム
昭和十八年一月一日　新年遥拜式挙行
昭和十八年一月八日　第一三回大詔奉戴日行事実施
仝年一月三十日　学藝會ヲ開催ス
仝年二月五日　中等学校入学願書締切リ
仝年二月八日　第一四回大詔奉戴日行事実施
仝年二月十一日　紀元節遥拜式挙行
仝年三月三日　桃の節句
仝年三月六日　地久節（前年通リ実施ス）
仝年三月八日　第十五回大詔奉戴日行事実施
仝年三月二十三日　修了証書並ニ修業証書授與式挙行
初等科修了児童　男一四人　女二〇人　計三四人
高等科修了児童　男二一人　女一一人　計三二人

昭和十八年四月一日　始業式並ニ入学式挙行
本学年度入学児童左記ノ通リ
初等科男一七人　女二〇人　計三七人
高等科男一三人　女一九人　計三二人
仝年四月六日
校庭美化作業ニ依リ校門ヨリ玄関迄ノ通路ヲ作ル
仝年四月十二日　三月三十一日附発令左記ノ通リ職員ノ移動通知ヲ受ク
波照間校訓導　竹原孫恭　補大浜校訓導
仝上　竹原房　補登野城校訓導
石垣校訓導　大濱方三　補波照間校訓導
仝年四月十九日　本学年度職員児童身体検査ヲ施行ス
仝年四月二十日　四月十五日附発令辻野秀助教　本校助教ニ補セラレ本日赴任
本校本學年度学級編成並ニ教員配置左記ノ通リナリ

学級	学年	児童数 男	児童数 女	児童数 計	職名	氏名	俸給額
第一學級	初一	一七	二〇	三七	助教	米盛　富	三五
第二學級	初二	二二	一九	四一	仝上	石垣　節	三五
第三學級	初三	一七	一四	三一	仝上	辻野　秀	三五
第四學級	初四	二七	二〇	四七	仝上	西白保重雄	三八
第五學級	初五	一七	一八	三五	仝上	田盛　毅	三五
第六學級	初六	一五	二一	三六	訓導	大濱方三	六一
第七學級	高女	、	三七	三七	訓導	前那覇政二	五一
第八學級	高男	三七	、	三七	訓導	前新加太郎	六九
合計		一五二	一四九	三〇一	訓導　助教	三人　五人	

仝年四月二十四日　靖國神社臨時大祭ニツキ午前十時十五分在所ニ於テ感謝ノ祈念ヲ捧グ
仝年四月二十九日　天長節遥拝式挙行
引続キ青少年団入隊團挙行

仝年五月一日
本日中健民運動強調期間ニ就キ左記行事計劃実施ス
令旨奉読式挙行
心身鍛錬強歩訓練　本島一周遠足
乳幼児体力測定　家庭内外清掃訓練
学校衛生懇談會　蛔虫駆除実施
仝年五月六日　五年以上児童部落会ノ害虫駆除ニ協力ス
仝年五月八日　第一七回大詔奉戴日行事実施
仝年五月十日　五月八日附発令　田盛　毅助教　本校助教ニ補セラレ本日赴任ス
仝年五月十二日
一、本校児童ノ読ミノカヲ伸スタメ毎週水曜日ヲ朗読会ト定メ朝礼場ニ於テ読本ノ朗読ヲナサシム
一、標準語礼法勵行縣民運動ノ徹底ヲ期スルタメ左記ノ通リ目標ヲ定メソノ実践ヲ強要ス
一、児童相互間ハ絶対ニ方言ヲ使用セヌコト
一、児童ヨリ父母兄姉ニ対シテハ絶対ニ方言ヲ使用セヌコト
一、方言ヲ以テ話シカケラレテモ決シテ方言ヲ以テ應ゼヌコト
仝年五月二十二日　青少年学徒ニ賜ハリタル勅語奉読式挙行
仝年五月二十三日
青年團査閲要項ニ基キ豫備訓練査閲ヲ行フ
仝年五月二十五日　楠公祭ニツキ左記ノ通リ行事ヲ営ム
一、楠公ノ純忠ニ就キ講話
一、湊川神社遥拝式挙行
仝年五月二十七日　海軍記念日ニ就キ記念式挙行
仝年五月二十九日　父兄母姉懇談會開催　引続キ保護者會総會ヲ開催ス
仝年六月二日
一、山本五十六提督ノ壯烈ナル戰死並ニアッツ島皇軍將兵山崎部隊長ノ玉砕ニツキ通報ヲ受ケ戰線ニ続カン決意ヲ固ム
一、西部第四一五四部隊陸軍少尉鉄田義司外附添上等兵一人来校
部落会学校連合ニヨリ歓迎會ヲ催ス
一、鉄田少尉ノ軍事講演アリ
仝年六月八日　第十八回大詔奉戴日行事実施
仝年六月十四日　蛔虫駆除実施
仝年六月二十五日
八重山郡青年團主事太田正吉来校
本日當青年團ノ訓練査閲ヲ実施シ好評ヲ受ク
仝年六月二十六日

西白保重雄助教入團ノタメ本日出発ニツキ告別式ヲ挙行シ歓送ヲナス
仝年七月七日　支那事変記念日ニツキ記念講話ヲナス
尚恤兵献金ヲ取纏メ発送ス
七夕ノ民族行事教科ト連絡ヲハカリ実施ス
仝年七月八日　第十九回大詔奉戴日行事実施
仝年七月十五日　本日ヨリ夏季心身鍛錬水泳会実施
毎日午后三時開始　午后五時三十分終了五日間
仝年七月三十一日　青年常会開催甘藷競作会参加ヲ協議決定ス
仝年七月二十二日　七月二十日附発令助教黒島直二郎本校助教ニ補セラレ本日赴任ス
仝年七月二十七日　校内運針競技会ヲ開催ス
崎枝　勇氏ヨリ本校備品費トシテ金五円ノ寄附ヲ受ク
仝年七月三十一日　第一学期終業式挙行
仝年八月六日　八重山郡青少年囡体育錬成大会　女子青年團参加成績不振ナリ
仝年八月八日　第二十回大詔奉戴日行事実施
本年度夏季心身鍛錬期間実施要項左ノ通リ
毎日ラヂオ体操強歩訓練　冷水摩擦　家庭清掃　学習実施　軍人援護奉仕作業　常会　手旗訓練等集團訓練ヲナス
仝年九月五日　本日ヨリ教科報國実践強化週間ニツキ実践計劃樹立強力ニ実施ス
仝年九月八日　第二十一回大詔奉戴日行事実施
仝年九月十一日　本日ヨリ八重山郡少年團幹部錬成会開催セラルニツキ當少年團ヨリ左記男女二人■出席ス
北分團　白保政吉　名石分團　前田盛成現
前分團　西田原　文　名石分團　石野トシ
仝年九月二十日　航空日
児童製作グライダー展　競翔會開催
仝年十月三日　軍人援護ニ関スル勅語奉読式挙行
仝年十月十五日　靖國神社臨時大祭行ハルニツキ休業
仝年十月二十五日　秋季國民錬成大會開催
仝年十月二十七日　登野城校長宮城信範来校海軍志願兵勤奨講演會開催
仝年十一月三日　明治節遥拜式挙行
式後健民大会ヲ催ス尚部落会主催奉祝会ヲ催ス
仝年十一月五日　十月二十五日発令大濱澄助教本校助教ニ補セラレ本日赴任
仝年十一月十七日　本校児童ノ読ミノカヲ伸スタメ毎週水曜日暗誦会ヲ催シ好成績ヲ収ム
仝年十一年二十九日　本年度海軍志願兵受験日
當國民学校ヨリ二人　青年学校ヨリ五人ノ受験生アリ
仝年十二月八日　大東亜戰爭　第二周年記念日ニ當ルヲ以テ記念式ヲ挙行シ米英撃滅　必勝ノ

信念ヲ堅持ス

仝年十二月二四日　第二学期終業式挙行

冬期心身鍛錬期間ニ入ルヲ以テ左記心身鍛錬要項ニ基キ各分團別自治的鍛錬ヲナス

一、暁天強歩訓練　一、朝よみ

一、家庭内外清掃作業　一、大舛大尉偉勲顕彰作品

一、神棚佛壇拝礼　一、書初

其ノ他毎日三時間■学校待避壕掘リ作業実施

昭和十九年一月一日　新年遥拝式挙行

仝年一月六日　本校訓導與那覇政二海軍ニ編入召集ヲ受ケ本日出発ニ付告別式ヲ挙行シ歓送ヲナス

豫テ師範学校研究科入学中ノ大濵方三訓導研究科卒業帰校

本校助教黒島直二郎家庭ノ都合ニ依リ依願退職

仝年一月八日　第二五回大詔奉戴日行事実施

仝年一月十三日

本軍出身大舛中隊長ノ戰死一周年記念日ニ就キ今後毎月十三日ヲ大舛記念日ト定メ少國民ノ大舛中隊長ニ続カン精神ト身体ノ鍛錬ヲナスタメ全校児童強行軍ヲ実施ス

仝年一月十四日　十二月三十一日附発令前本文本校助教ニ補セラレ本日赴任ス

本日縣視学天願朝行先生学校視察並ニ部落視察ノタメ来島

青少年ノ甘藷競作會審査ヨリ学校視察部落一般ノ視察ヲ遂ゲル

一、学校一般ニ関シ視察

一、児童ニ対シ朝礼訓話

一、授業視察

一、青年團幹部ニ対シ座談會

一、英霊ノ家庭訪問

一、部落民ニ対スル講演會

一、島内視察　田畠海岸等

視察ヲ終ヘ賞詞多キ講評ヲナサレ

一月二十八日歸廳セラル

仝年一月二十九日

各教室ニ寒暖計ヲ設備シ観察記録表ヲ作製シ、氣温、天氣ニツキ測定記録セシム

仝年二月五日

本日ヨリ十一日ニ至ル一週間教化報國実践強化週間ニ就キ週間中行事計劃樹立実践強化ヲハカル

部落内道路修理　家庭清掃　軍人家庭奉仕作業　墓参等ヲ分團別ニ実施ス

仝年二月八日　第二六回大詔奉戴日行事実施

仝年二月十一日　紀元節遥拝式挙行

式後健國祭の祭典ヲ行フ
尚部落會主催奉祝會ヲ催ス
仝年二月十七日　祈年祭ヲ執行フ
仝年二月二十二日　中等学校入学出張考査行ハル
仝年二月二十九日
仲白保幸助氏第一線ヨリ御眞影奉安庫建設費ニト金拾円也寄贈ヲ受ク
仝年三月二日　青年体力検定會開催
仝年三月五日　大麻焼納祭ヲ執行フ
仝年三月六日　地久節　皇后陛下御仁徳謹話
仝年三月八日　第二十七回大詔奉戴日行事ヲ実施ス
仝年三月十日　本学年度学藝會開催
陸軍記念日祈念講話後　午前午后二回ニ亘リ戰意昂揚　必勝祈願ノ意義ヲ以テノ児童学藝ヲ
男女青年團、一般父兄ニ対シ観覧セシム
仝年三月十三日　大舛記念日ニツキ強行軍実施
仝年三月十六日
一、高等科修了児童記念樹木（シユロ）二本　職員室前ニ植樹
一、観察地並ニ防火用水池ヲ玄関前ノガジュマル樹ノ下ニ掘ル
仝年三月二十三日
昭和十八学年度修了証書並ニ修業証書授與式ヲ挙行ス
本学年度修了児童
初等科　男　十五人　女　二一人　計　三六人
高等科　男　二三人　女　一八人　計　四一人
仝年三月二四日
本学年度受験児童中合格者左記ノ通リ
男師　白保政吉
水産　上里清幸
八中　上盛松英
仲底善吉
八農　前田盛成現
宮城泰三
石野トシ
仝年三月三十一日
高等科修了児童ノ記念粗鐵植樹
昭和十九年三月三十一日附発令左記ノ通リ職員ノ移動アリ
波照間校長　桃原用永　補竹富校長

仝　教頭　前新加太郎　補竹富校訓導
仝　助教　石垣　節　補大濱校助教
仝　辻野　秀　補黒島校助教
石垣校教頭　識名信升　補波照間校長
波照間校訓導　大濱方三　補仝　教頭
白保校訓導　辻野榮次　補仝　訓導
登野城校訓導　識名　清　補仝　訓導
仝年四月一日　始業式並入學式擧行　入學児童左記ノ通リ
初等科　男　二六人　女　一七人　計　四三人
高等科　男　一四人　女　二一人　計　三五人
仝年四月八日　本學年度学級編成並教員配置左記ノ通リ定ム
米盛　富
大濱　澄
石垣トミ子
前本　文
識名　清
田盛　毅
上里眞昭
新盛良政
辻野栄次
大濱方三

仝年四月二十六日　本校出身第一回産業戦士トシテ左記三名勇躍出発ス
西田原文　稲福シゲ　宮良トク
仝年四月二十九日　青少年団入団式擧行　新入団員左記ノ通リ
青年団四七名　小年団　四三名
仝年四月三十日発令　五月十一日赴任
當校附設青年学校教練科専任指導員トシテ石垣三郎任命サル月俸四十円給與
仝年五月十二日　聯合艦隊司令長官古賀峯一大将殉職ノ報ニ接シ故元帥ノ英靈ニ対シ黙祷ヲ捧グ
仝年五月二十二日　青少年学徒ニ賜ハリタル勅語奉読式挙行
仝年六月三日　青校教諭石野盛正海軍ニ編入召集ヲ受ケ六日勇躍壮途ニツク
仝年六月二十五日　菅公生誕一千一百年記念祭挙行
仝年七月十六日　本校創立五十周年記念式挙行
仝年十月五日　午後四時三十分戦闘機一機不時着ス　操縦士　塚本庄一郎　顔面及脚部ヲ負傷シ職員部落有志婦人会等ノ手當ヲ受ク

仝年十月十二日■（※7）校地校舎ノ擬装作業開始
仝年十月十五日附発令　田盛　毅助教　依願退職
仝年十月十四日　午前十時五十分敵機二機来襲、空襲ナシ
仝年十月二十八日附発令　大浜　澄助教　依願退職
　上里真昭本校助教ニ補セラル
仝年十月三十一日附発令　石垣トミ子本校助教ニ補セラル
仝年十一月三十日　金属類回収ノタメ校地内施設ノ鉄棒三本ヲ取外シ献納ス
仝年十二月八日　民間ヨリ借用ノ学校水田ノ耕作々業開始ス
仝年十二月十九日　本校創立五十周年並大東亜戦争三周年記念植樹ヲナス
仝年十二月二十二日附発令　新盛良政本校教授ニ補セラル
仝年十二月二十五日　學校農業実習用トシテ島尻氏ヨリ耕牛（五〇〇円）ヲ購入ス
　當字出身戦没軍人ノ招魂祭ガ校内ニ於テ嚴カニ執行サル
昭和二十年一月六日　石垣國民学校附設陸軍病院へ児童調製ノ阿旦葉草履百五十足慰問品トシテ発送ス
仝年一月十三日　大舛大尉二周年記念式挙行
仝年一月十八日　第二回校地校舎ノ擬装作業実施ス
仝年一月二十一日午前十一時四十分敵機八機来襲シ機銃掃射アリタルモ學校ニ被害ナシ　被害左ノ通リ
　民家全焼　一、穀倉全焼四
仝年一月二十二日　空襲ノタメ本日ヨリ一週間授業ヲ停止ス
仝年一月二十六日　昭和二十年度中等学校入学志願者ニ関スル書類調製ス
　入學志願者　八重農　二名　八重中　三名　八重女　三名
仝年一月二十九日　學校西方ヤラブ林ニ防空壕ヲ構築ス
仝年二月八日　午後零時二十五分敵機大型機一機来襲シテ島内ヲ三回旋回シ機銃掃射、爆弾投下アリタルモ學校ニ被害ナシ　被害左ノ通リ　田福氏鰹製造工場全焼
仝年二月九日　空襲ノタメ本日ヨリ當分ノ中授業停止ス
仝年二月十一日　空襲ノタメ紀元節遥拜式ヲ中止ス
昭和二十年三月二十四日
　修了式並ニ修業式挙行ス
　修了生　男子　十二名　女子　一九名
仝年四月一日　入學式挙行
　入學児童　男子　廿八名　女子　十七名
一、空襲激シク授業思ハシク出来ズ
一、入學児童アルモ合同教育ノミ
一、其ノ筋ノ命ニ依リ移動準備ヲナス
一、島民挙ッテ西表島へ引越ス準備ヲナス

一、學校ハ当番ヲ設ケ順次引越ス準備ヲナス

一、蓄牛、山羊の最後的段取リヲナス　共ニ賣却ス牛ハ軍へ　山羊ハ上里氏へ

本學年度學級編制並ニ教員配置表

學級	學年	児童数 男	児童数 女	児童数 計	職名	氏名	俸給額
第一學級	第一學年	一八	一七	三五	助教	米盛　富 識名　清	四二 六五
第二〃〃	第二〃〃	二七	一七	四四	訓導	識名　清	六五
第三〃〃	第三〃〃	一七	二二	三九	助教	石垣トミ子 識名信升	三八 九二
第四〃〃	第四〃〃	二四	一九	四三	助教	前本　文 辻野栄次	三八 七二
第五〃〃	第五〃〃	一七	一四	三一	助教	上里眞昭 識名信升	四〇 九二
第六〃〃	第六〃〃	二四	二一	四五	教頭	大濱方三	七九
第七〃〃	第七〃〃	一六	一九	三五	助教	新盛良政 辻野栄次	四〇 七二
第八〃〃	第八〃〃	一五	二一	三六	教頭	辻野栄次	七二
		一五八	一五〇	三〇八（※8）	校長	識名信升	九二

仝年四月ノ始メ其ノ筋ヨリ西表島ヘ引越セノ命ヲ受ク

仝年四月八日

其ノ筋ノ命ニ依リ部落民一人残ラズ西表島南風見ヘ引越シ避難スルコトトナリ児童ハ父兄ト共ニ職員ハ部落民ト共ニ次々ト引越シ学校ハ重要書類及器具ヲ保持シテ四月半ヲ過ギテ引越ヲ了ス

仝年四月二十九日

避難地ニ於テ假事務所一棟ヲ建テ重要書類等ノ保管ヲナシ児童ノ訓育ヲ続ケタリ

仝年五月

避難地ハ南風見（元）の西ヨリ約一里半以上ノ海岸地帯ニ散在シ遠クハ古見村、ユブ島マデ擴リテ生活セリ

仝年四月

石垣トミ子助教ハ三月ノ休暇ニ帰省シテ便船ノ都合悪ク帰校セズ

仝年五月
大濱方三教頭ハ西表島ヨリ出身地石垣町ヘ帰省セルモ帰校セズ　前本文助教モ出身地竹富ヘ仝上、
仝年五月
部落ヲ廿余班ニ組織シ班ハ一家ノ如ク会食ヲナシ共同シテ萬事ニ当ル
仝年六月八日
食糧ノ欠乏日々ニ迫リシタメ、波照間島ヘ向ケ粟ノ収穫ノタメ決死収穫隊ヲ各班ヨリ選出シ六十六名ヲ波照間島ニ派遣ス、収穫隊ハ鹿川港ニ於テ日暮時豊福丸ニ乗船、一隊ニ辻野栄次訓導モ参加収穫作業ヲナシ六月半（※9）日無事西表島鹿川港ヘ帰ル
識名校長並ニ識名訓導出身地石垣町ヘ引越ス
仝年六月二十六日
食糧品、稲ノ刈取リノタメ第二回目決死収穫隊ヲ選出シ百四十七名ヲ波照間島ニ派遣、一隊ニ上里真昭助教並ニ新盛良政助教モ参加シ収穫作業ヲナシ七月ノ半ニ無事南風見ヘ帰ル
仝年七月三十日
マラリヤ罹病者続出シ死亡者数十名ニ上リシタメ識名校長一行ハ夜行デ旅團本部ヘ行キ窮状報告ト帰島ノ件許可ナルヤウ陳情ス　即日許可ナル識名訓導西表島ユブ島ヘ帰校ス
仝年八月二日
南風見ノ挺身隊館ニ於テ緊急部落会ヲ開催シ島ニ帰ツテ玉砕スルノガ良イカ現在通リ避難ヲ続ケルガ良イカ大評定ノ結果踏ミ止マルノ希望者一人モナク萬場一致帰島スルコトニ決議ス
仝年八月七日
折カラノ大潮ヲ利シ古見川奥ニ避難シ居タル発動機船ハ暗夜ニ出動開始古見班ヨリ帰島開始南風班ユブ班ノ順ニ依リ尚病人老人小人ヲ先ニ帰島セシメ健康ナ青壮年ハ最後マデ残リ人間ハ勿論家具一切ノ引揚ヲ完了ス
避難中マラリヤ罹病者数百名死亡者約七十名ヲ出セリ
帰島後部落民ハ食無ク看病人ナクテ死亡者続出シ数百人ヲ死亡セシメ児童モマラリヤノ為「六十六名」死亡セリ
仝年十月二十四日
識名信升校長ノ長女和子（六才）ハ、マラリアノタメ住宅ニ於テ死亡、仝日午后埋葬ス
仝年十二月十日
識名信升校長並ニ識名清訓導ハ出身地石垣町ヘ引越ス
仝年十二月
命ニ依リ授業開始ス
当日學校ニ出勤セル職員ハ辻野栄次訓導上里眞昭助教、新盛良政助教、石野盛正教諭ノ四名ニシテ複式編制ニテ授業ヲナセリ
昭和二十一年一月七日
郡下校長会ノ決議ニヨリ出校日ヲ週二回トシ國語算数ニ重点ヲ置キ教授ヲナス

仝年一月七日
　青年學校ハ廃校トナル
仝年二月十二日
　応召中ノ與那覇政二訓導帰校ス
仝年二月十五日
　米盛富助教ハ石垣町ヨリ帰校シ授業ヲナス
仝年二月二十五日
　與那覇訓導ハ授業ヲナス
仝年二月二十八日
　石野先生　授業ニ當ル
仝年三月十三日
　部落常会ヲ開催シ左記事項決ス
1、昭和二十二学年度ニ於テ各校教員数ヲ半減スル予定ニ対シ学区ニ於テ経費ヲ負担シ教員ノ
　増員ヲ圖ル希望アリヤニ対シ、三名増員ニ決定ス
2、教員ノ食料補助ノ具体的対策ヲ打合セ
3、校舎ノ調等ヲナス
仝年三月十六日
　校長識名信升（昌洋丸ヨリ）帰校ス
仝年三月二十一日
　本学年度　修了式並ニ修業式挙行
　紅白ノ幕　在所不明
　修了生　男子十二　女子十六　計　廿八名
仝年三月三十一日付発令左ノ通リ移動アリタリ
　校長　識名信升　訓導　米盛　富
　教頭　辻野栄次　助教　上里眞昭
　訓導　識名　清　〃　西島本信升
　〃　與那覇政二　〃　新城　修
　〃　石野盛正
仝年四月一日　入學式擧行　男十一名　女十五名　入學

本學年度學級編制並ニ教員配置表

學級	學年	在籍數 男	在籍數 女	在籍數 計	職名	氏名	俸給額
第一學級	初等科 第一学年	一一	一五	二六	訓導	米盛　富	七七
第二〃〃	仝 第二〃〃	一八	一三	三一	仝	識名　清	一一二
第三〃〃	仝 第三〃〃	二〇	一一	三一	助教	新城　修	六五
第四〃〃	仝 第四〃〃	一一	一八	二九	仝	上里眞昭	六八
第五〃〃	仝 第五〃〃	二〇	一五	三五	仝	西島本信昇	六八
第六〃〃	仝 第六〃〃	一八	一二	三〇	訓導	石野盛正	一〇五
第七〃〃	高等科 第一〃〃	一七	一五	三二	教頭	辻野栄次	一二二
第八〃〃	仝 第二〃〃	一二	一二	二四	訓導	與那覇政二	一〇八
計		一二七	一一一	二三八	校長	識名信升	一六〇

仝年九月二十四日
昭和ノ年號ヲ呼稱スルコトニナル
仝年九月三十日
金五十円宛一率増俸発令
仝年十月十七日
使丁西里スミ解庸、本比田スミ子ヲ採用ス　日給壱弗也
仝年十月三十一日
教員ノ移動発令アリタリ
本校々長識名信升ハ大濱初等学校長ヘ轉任
本校訓導識名清ハ依願退職
石垣校教頭宮良信雄ハ本校々長ニ任命
本校教官補ニ島村ヤス子任命、十一月一日赴任
仝年十一月三日
事務引継ヲ完了ス
仝年十一月十二日
宮良信雄校長赴任
仝年十一月二十五日

教官米盛富結婚ニ依リ宮良富ト改稱ス

昭和二十二年一月二十三日

八重山支庁ヲ八重山假支庁ト改稱ス

仝年三月二十三日

本学年度修了式並ニ修業式挙行

修了生男十二名女子十一名、午後學藝会開催

仝年三月三十一日

本校々長宮良信雄ハ竹富初等学校長ヘ轉任

白保校々長安室孫亨ハ本校々長ニ任命

本校教官宮良富ハ平眞校教官ニ轉任

昭和二十二學年度八重山農林學校入學者ヲ西島本進、米盛安、辻野さよノ三名ヲ出ス

仝年四月一日

入學式挙行　入學児童男十七名　女十二名　ジュニアースクール一、二、三年ヲ二學級ニ編制ス

第一学年ヲ第七学級トシ第二、三學年ヲ第八學級トス

仝年四月十八日

安室校長、新垣弘教官補赴任

本學年度學級編制並ニ教員配置表　二十二学年度

學級	學年	在籍数 男	在籍数 女	在籍数 計	職名	氏名	俸給額
第一學級	第一學年	一七	一二	二九	教官	仲本トシ	三〇〇
第二〃〃	第二〃〃	一三	一六	二九	教官補	仲本トシ 西島本信升	三〇〇 二一〇
第三〃〃	第三〃〃	一九	一三	三二	仝	安室孫亨 島村ヤス子	四一〇 二〇〇
第四〃〃	第四〃〃	二〇	一三	三三	仝	安室孫亨 新城　修	四一〇 二一〇
第五〃〃	第五〃〃	一一	一七	二八	仝	石野盛正 上里眞昭	三二〇 二二〇
第六〃〃	第六〃〃	二二	一七	三九	教官	石野盛正	三三〇
第七〃〃	第七〃〃	二二	一四	三六	教官補	辻野栄次 新垣　弘	三六〇 三三五
第八〃〃	第八〃〃	一八	一七	三五	教頭	辻野栄次	三六〇
計		一四二	一一九	二六一	校長	安室孫	四一〇
					教官 教官補	四人 五人	

仝年四月二十二日
ジュニア三學年生　本日迠出校ス
仝年五月二十二日
公文書ノ年号ハ總テ西暦ヲ使用セヨノ命アリ
仝年五月十七日
校歌改訂
仝年五月二十七日
独立記念日ニツキ保護者總会ヲ開催シ授業参観ト學校懇談ヲナシ引継キ
体育大会ヲ開催ス
午後五時ヨリ部落幹部ト學校職員トノ合同懇談会ヲ學校ニ開ク
仝年五月三十一日
現在俸給ノ壱割五歩程度ノ一斉増俸発令
仝年六月三十日
助教上里眞昭　本校教官ニ任用替
仝年七月二十一日ヨリ八月三十一日マデ
夏季休業トナル　但シ休業中七日ハ出校日（出勤）トス
仝年八月七日ヨリ十日間
シニア校ニ於テ初等学校教員英語講習会開催
辻野教頭、新垣、島村教官補授講ス
仝年八月十八日ヨリ二十七日マデ
仝ジク後期ノ講習会開催、石野、仲本教官　上里教官、西島本、新城教官補受講ス
仝年九月四日
甘藷ノ中間苗約千本第二農場ニ植付ク
仝年九月十日
文集　磯のかおり　第一號発行ス
仝年九月十九日
婦人講座開設ス
一九四七年十一月十日
當校教官石野盛正波照間実業高等學校へ轉任ニツキ告別式ヲ挙行ス
仝年十一月十一日
波照間ミネ教官補當校赴任ニツキ新任式ヲ擧行ス
仝年十一月十五日
波照間実業高等学校開設ニ対スル諸準備ノタメ第四學年生ヲ学校ニ召集シ段取ヲナス
仝年十一月十八日
波照間実業高等學校開校式並ニ入學式ヲ擧行ス
仝年十一月二十八日

夜間ヲ利用シ青年会主催体験発表演舌会ヲ開催ス

仝年十一月二十九日

波照間実業高等學校開校記念式ヲ挙行シ引継キ官民合同ノ祝賀会開催ス

仝年十二月四日

本學年度學級懇談会ヲ各學級別ニ開催ス

四日午前三年、六日八七年、九日八一年、土日八四年、十三日八二年、十六日八五年、十八日八八年、二十日八六年　各学級ノ父母姉全員出校シ好成績ヲ上グ

仝年十二月八日

珠算競技会ヲナス　四五年八仝問題トシ六、七、八年八仝問題トシタ

一九四八年一月二十九日

學藝會ヲ開催ス　午前二一回、午後一回演出ス

午前八老人男女婦女子ヲ案内シ二六〇名出席、午後八部落ノ幹部、青年会幹部、実習校生徒出席シ二〇〇名観覧ス

（午前八時二〇分—十二時四〇分。午後一時四〇分ヨリ六時二〇分）

一九四八年二月十八日

八年生（修了生）ノ慰労ノ会ヲ催ス　山羊ヲ屠殺シテ職員一同共ニ晩餐会ヲナス（四時ヨリ六時マデ）

仝年二月二十六日

本年度八重山農林高等學校受験生男子吉村清治、仝女子、島村竹子、仝、田福アイヲ引率シ辻野教頭石垣市ヘ出張ス

仝年二月二十七日

本校使丁本比田スミ子家事ノ都合ニ依リ退職願出ヅ

仝年三月九日

本校児童中ノ孤児及更正世帯ノ児童ニ対スル衣類及鉛筆ノ無償配給アリタルニツキ配分ス

八重山民政府教育厚生部教育課長波照間永伴氏並ニ仝属譜久村氏来校シ孤児及貧困児ヲ激励シ職員ト教育座談会ヲ開ク

仝年三月十日

竹富村長、竹富村議選挙ノタメ教室ハ投票所トナリ仝十一日ハ開票ノタメ両日ハ臨時休業トナル

仝年三月十四日

来学年入学児童ノ諸調査及準備教育ノタメ該当児及保護者ノ集合ヲナス

仝年三月十七日

各學年使用中ノ教科書ノ全冊ヲ取纏メ学校ニ保管ス

仝年三月十八日

波照間実業高等學校第一回修了式並ニ修業式ヲ挙行ス　初校職来賓父兄及初等学校八年生列席ス修了生ノ謝恩会アリ

仝年三月二十日
初等学校第二回修了式及び修業式挙行ス　三月十九日ハ修了生ノ謝恩会ヲナス
仝年三月二十八日
青年会總会ノ開催アリ　晩ハ青年会幹部及當校職員ノ慰労会ヲ催ス
仝年三月二十二日
各部落單位ニ初校並ニ実校父兄ヲ集メ教育懇談会ヲ開ク　三月二十二日北部落、二十四日南部落、二十六日前部落、二十八、名石部落、三十日外部落トシ、父兄及全生徒ノ参集セシ所モアリ父兄ノミ参集セル所アリテ部落担当ノ教員ヲ中心トシテ支会ガ主催シ盛況ナリキ
仝年三月二十六日
児童用札腰掛其ノ他ノ器具ノ大修繕及新調作業始マリ四月一日修了ス
仝年三月三十一日
當校校長安室孫亨ハ小濱初等学校長ニ轉任、〃教官補波照間ミネハ川平初等学校教官補ニ轉任、〃教官補新垣弘ハ家事ノ都合ニヨリ依願退職トナル

注　記

（※1）原本判読が難しいが、「計」から修繕費、奨励費、需用費、雑給をひくと、「給料」の欄は三〇二四となる。
（※2）再計算すると、月俸額合計は「二八六」である。よって、月棒額の平均値は「四七・六七」である。
（※3）人数記載ない。
（※4）原本は略字表記で判読不明だったが、黒島初等学校沿革誌より確認した。「昭和十三年度四月三十日　訓導兼校長　浦崎賢保　沖縄縣属視學ニ任命」
（※5）原文ママ。
（※6）本文ママ。吉元か。
（※7）「第一回か」。後掲昭和二十年一月十八日の項に「第二回」とあるため。
（※8）毛筆で「三二三」と記された横に硬筆で「三〇八」と訂正されている。その上の欄「一五八」と「一五〇」という数字は、児童数男女別の合計で、あとから硬筆で書き足されている。
（※9）「半」の字は薄く読みづらいが、「六月半ば」を意味するものであろう。

編集後記

『竹富町史だより』〈第43号〉を刊行することができました。本号は、主に星野岳義の「水利をめぐる伝承―西表島祖納集落のウーヒラカーの位相―」と「〈資料紹介〉波照間小学校沿革誌③」を中心に構成しました。

前者は、水利をめぐる数多い伝承のなかで、西表島祖納集落の井戸「ウーヒラカー」の由緒はどのように位置づけられるかといった発想から書き起こされています。これは水利をめぐる伝承について、今後議論の基盤となりえるものでしょう。

後者は『竹富町史　第10巻　資料編　近代５　波照間島近代資料集』に収録の「波照間小学校沿革誌」を活字化したもので、①（第37号）、②（第38号）に続くシリーズですが、③は1948年３月までの記述を収録し、今回で完結です。

その他、古谷野洋子氏の「波照間島の農業の伝承知識　―＜畑の民俗名称＞の事例から―」は、最新の研究成果をコンパクトにまとめてくださいました。

ところで、星野氏の原稿のように、ひとつひとつの史資料を突き合わせていくと、意外な結果を導くことがあります。それはとりもなおさず研究の醍醐味ともいえるものです。今年度発刊した『竹富町史　第七巻　波照間島』も、「波照間小学校沿革誌」や古谷野氏の原稿を併せて読んでみると、また新たな発見があるものと思われます。このような発見により歴史はより深まり、豊かな様相を見せるのでしょう。

2019年３月29日発行

竹富町史だより

第43号

編集発行　竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町６－18－３F

TEL　0980－87－6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp